

三<sup>み</sup>尋<sup>ひろ</sup>石<sup>いし</sup>遺跡 IV

1999年3月

長野県飯田市教育委員会

<sup>み</sup>三 <sup>ひろ</sup>尋 <sup>いし</sup>石 遺 跡 IV

1999年3月

長野県飯田市教育委員会

## 序

飯田市は「人も自然も美しく、輝くまち飯田—環境文化都市」として基本計画に示すとおり、山紫水明の自然環境に恵まれ、原始・古代より多くの人々が生活を営んできた地域であります。近年全国的に進められている開発工事は、この飯田市に於いても例外でなく、現在まで保存されてきた埋蔵文化財が破壊されつつあります。本来ならば過去から現在まで保存されてきたと同様に地中に保存していくのが最善の方法であります。地域社会の発展を考える上に於いては、発掘調査を行い記録保存することによって、後世に埋蔵文化財を残すことはやむを得ないことと考えております。

今回発掘調査を実施した三尋石遺跡は、飯田市伊賀良地区に所在し縄文時代を中心とした遺跡です。本遺跡内に市営三尋石団地を改築するというで発掘調査を行いました。この調査により、縄文時代と弥生時代の集落跡が発見され、当時の人々の暮らしぶりを垣間見た気が致します。このように、これらの発掘調査の積み重ねによって地域の歴史の再構築が行われ、ひいてはその成果が私たちの生活に還元されていくものであります。

最後になりましたが、調査実施にあたり文化財保護の本旨に厚いご理解を賜った飯田市建設部、土地所有者の方・地元の皆様・現地・整理作業に従事された作業員の皆様に深甚なる謝意を申し上げる次第であります。

平成11年3月

飯田市教育委員会  
教育長 小林 恭之助

## 例 言

1. 本報告書は三尋石団地公営住宅建て替えに伴い実施された、飯田市伊賀良地区所在の埋蔵文化財包蔵地三尋石遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は飯田市建設部からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成10年度に現地作業、整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 発掘調査及び整理作業は、調査区が2箇所あったため、便宜的にA・B地区としてMH I 1971-1 IVA・Bを用いた。また、遺構には以下の略号を用いた。竪穴住居址・SB 掘立柱建物址・ST 溝址・SD 集石・SI 土坑・SK
5. 本遺跡は平成3・4年度に土地改良総合整備事業に伴い、1次・2次の発掘調査が、また平成8年度に3次調査がおこなわれているので、今次調査は4次調査として扱う。よって遺構番号は3次調査の連番とした。ただしSB39・SK198は欠番となっている。
6. 三尋石遺跡に於ける発掘調査位置は国土基本図の区画、MC-05にそれぞれ位置し（社団法人日本測量協会 1969 「国土基本図図式 同適用規定」 参照）、グリッド設定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、株式会社ジャステックに委託した。
7. 本書の記載については遺構の順とし、住居址については時代順とした。遺構図・遺物図版・写真図版等は本文末に一括した。
8. 土層観察については小山正忠・竹原秀男 1996 「新版標準土色帖」による。
9. 遺物写真撮影は、株式会社ジャステックに委託した。
10. 遺物実測図の縮尺については、下記のとおりである。  
土器 復元実測図1/4 及び1/6、拓本及び断面1/3、土製品2/3  
石器 小型石器1/1、大型石器1/4、他1/3
11. 石器実測図の表現については「T」刃潰し加工・「K」敲打・「S」研磨を示す。詳細は、（飯田市教育委員会 1998 美女遺跡）を参照のこと。
12. 本書は担当者の協議の上、吉川金利が執筆・編集し、小林正春が総括した。
13. 本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館及び飯田市上郷考古博物館で保管している。

# 目 次

序		◎S B36	12
例 言		◎◎S B37	12
目 次		◎◎◎S B38	13
		◎◎◎◎S B40	13
		(2)弥生時代	
I 調査の経過		◎◎◎◎◎S B32	14
1. 調査に至るまでの経過	1	4. 方形周溝墓 (SM)	
2. 調査の経過	1	◎◎SM01	15
3. 調査組織		5. 埋設土器	
(1)調査団	2	◎◎埋設土器 1	15
(2)事務局	2	6. 土坑 (SK)	
		S K199~230	15
II 遺跡の環境		7. ビット	16
1. 自然環境	3	8. 土層観察表	17
2. 歴史環境	3		
III 調査結果		IV まとめ	
A地区		1. 三尋石遺跡に於ける縄文時代中期後葉の	
1. 基本層序	7	土器様相について	19
2. ビット	7	2. 縄文時代中期後葉の集落について	20
B地区			
1. 基本層序	7	図版	29
2. 竪穴住居址 (SB)		写真図版	83
(1)縄文時代		報告書抄録	101
◎◎S B26	8		
◎◎S B27	8		
◎◎S B28	9		
◎◎S B29	9		
◎◎S B30	10		
◎◎S B31	10		
◎◎S B33	11		
◎◎S B34	11		

# I 調査の経過

## 1. 調査に至るまでの経過

平成6年度に飯田市建設部建築課より飯田市大瀬木地区に所在する三尋石団地公営住宅建替事業に伴う発掘調査の依頼が飯田市教育委員会にあった。そこで平成6年9月29日に県教育委員会・開発主体者である飯田市建築課建築係・飯田市教育委員会の三者により埋蔵文化財保護協議が行われた。その結果、当該地区は埋蔵文化財包蔵地三尋石遺跡内にあたり、埋蔵文化財の保存が望まれるが、工事の変更は不可能であるとの結論に達し、遺跡の状況を把握するべく試掘調査を行い、その結果改めて協議を行う事となった。

保護協議の結果を受けて平成7年度に試掘調査を行った結果、縄文時代中期と思われる竪穴住居址及び同時期の土器片が検出された。よって開発主体者・教育委員会の両者により保護協議を行った結果、工事対象地区は発掘調査を行い記録保存する事となった。

平成8年度に上記の協議結果を踏まえ、飯田市教育委員会によって発掘調査を行なった。その結果、縄文時代中期及び弥生時代後期を中心とした集落址が確認された。今年度開発対象区に於いても同様な様相が考えられたため、敢えて試掘調査等せず、旧住宅取り壊し終了後、発掘調査を行なうこととした。

## 2. 調査の経過

平成10年9月8日にA地区から重機により表土剥ぎを行った。しかし、一部の地点を除き遺構・遺物が確認できなかったため、写真撮影・測量のみ行い、精査は行わなかった。遺構・遺物が確認された箇所については、順次基準点測量と並行し、作業員による精査を行った。10月20日に調査が終了したため、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を委託し、終了した。

B地区についてはA地区と同様に重機による表土剥ぎを一部作業員による調査と並行して行い、排土を調査が終了したA地区に運搬した。また一部の排土については現場の保安上調査地区外に運び出した。当該地区は遺構の分布が地形に規制されると判断したため、作業員による調査の進行状況を見ながらコンタ図実測を委託した。

A・B地区の間にある道路部分については一部の地域住民が使用していたため、当初は調査を行わない予定であったが、遺構の分布状況から急ぎ調査することとし、多くの遺構・遺物を検出した。B地区及び道路部分の調査が終了した平成11年1月27日にA地区と同様、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を委託し、1月29日調査機材を撤収し現場作業の全日程が終了した。

今次調査の整理作業及び報告書作成については、当初は来年度以降行う予定であったがA地区が予想外に調査が不要であったため、期間・予算等の関係で平成10年度に行うこととし、現場作業と平成8年度調査分の整理作業と並行して行い、報告書刊行となった。

### 3. 調査組織

#### (1)調査団

調査主体者	飯田市教育委員会	教育長	小林恭之助		
調査担当者	佐々木嘉和	吉川 金利	福沢 好晃		
調査員	吉川 豊	山下 誠一	西山 克己	馬場 保之	下平 博行
	伊藤 尚志				
作業員	新井 幸子	新井ゆり子	池田 幸子	伊坪 節	太田 沢男
	岡田 紀子	金井 照子	金子 裕子	唐沢古千代	北原 裕
	木下 貞子	木下 義男	木下 力弥	木下 玲子	熊谷 義章
	小島 康夫	小平 晴美	小平まなみ	小林 定雄	小林 千枝
	斉藤 徳子	坂下やすゑ	佐々木一平	佐々木文茂	佐々木美千枝
	佐藤知代子	下田美美子	代田 和登	菅沼和加子	杉山 春樹
	瀬古 郁保	高木 純子	高橋 恭子	高橋セキ子	竹本 常子
	田中 薫	田中 博人	筒井千恵子	中平けい子	中平 隆雄
	仲田 昭平	中田 恵	仲村 信	中山 敏子	服部 光男
	林 伸好	林 ひとみ	原 昭子	平栗 陽子	福沢 育子
	福沢 幸子	福沢トシ子	古林登志子	牧内 修	松井 明治
	松下 省吾	三浦 厚子	南井 規子	宮内真理子	森山 律子
	山田 康夫	吉川 和夫	吉川紀美子		

#### (2)事務局

##### 飯田市教育委員会博物館課

小畑伊之助	(博物館課長)
小林 正春	(博物館課埋蔵文化財係長)
吉川 豊	(博物館課埋蔵文化財係)
山下 誠一	( " )
馬場 保之	( " )
吉川 金利	( " )
下平 博行	( " )
伊藤 尚志	( " )
福沢 好晃	( " )
牧内 功	(博物館課庶務係)

## II 遺跡の環境

### 1. 自然環境 (第1・2図)

飯田市は赤石山脈(南アルプス)と木曾山脈(中央アルプス)に挟まれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川に平行する河岸段丘地形を特徴とするが、これは両山脈の形成にかかわる断層地塊運動に伴い盆地や大きな段丘崖が形成された結果であり、天竜川支流の開析等による段丘・扇状地とあいまって複雑な地形を呈している。

三尋石遺跡が所在する伊賀良地区は、西側と東側で大きく地形が変化している。西半は木曾山脈の前山である笠松山(1271m)・高鳥屋山(1397m)東山麓にあたり、飯田松川・茂都計川をはじめ、笠松山・高鳥屋山を源流とする入野沢川・南沢川・滝沢川・新川などの河川によって形成された広大な扇状地が広がる。扇端はおおむね北方地籍では新井付近、大瀬木で伊賀良小学校付近、中村は長清寺付近であり、これより西側は傾斜の比較的急な斜面となっている。扇端の一部は前述の線を大きく越えて東側に伸びており、下殿岡地籍まで達するものもある。扇端付近では通例の如く湧水が豊かであるが、この扇状地は小河川により幾重にも複合して形成されているため、比較的湧水に恵まれ、今日でも横井戸を利用しての住宅も見られる。扇状地の形成に大きな役割を果たした小河川は、現在では堆積作用により下谷作用に転じているが、浸蝕力は弱く、開析谷の規模は比較的小さい。

これに対し、地区の東側は基本的には高位の段丘面が多くを占めており、扇端から離れるほど地下水位が低くなる。古代末以来、この高燥な地帯への井水の開削が繰り返され、大井をはじめ多くの井水が付設されているほか、地区内の大小河川は大規模な河川改修が行われてきた。

本遺跡は伊賀良地区西側にあたり、滝沢川により形成された扇状地に位置し、南北700m・東西1050m、面積62.5haを測る。調査地点は遺跡内北側に位置し、平成8年度調査地点の北側及び西側の隣接地に当たる。南側には下新井沢川が、北側には細田沢川がそれぞれ流れている。地形的には扇状地の扇尖部にあたり、南東に急傾斜する地点であり、その比高差は約7mを測る。また、標高は調査区中央部で約640mであり、市内に於いては高標高の遺跡である。

### 2. 歴史環境 (第2図)

伊賀良地区は埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布しており、これまで発掘調査がなされた遺跡は、学術調査による立野(1)・山口(2)・西の原各遺跡、中央自動車道建設にかかる志原・上の平東部・寺山・六反田・大東(3)・酒屋前(4)・滝沢井尻(5)・小垣外(辻垣外)(6)・三登測・上の金谷各遺跡、一般国道153号飯田バイパス建設にかかる殿原(7)・八幡面・小垣外各遺跡、広域農道西部山麓線建設にかかる飯田垣外・火振原(8)・梅ヶ久保・細田北(9)・北方大原(10)・直刀原(11)・河原林・入野・北方北の原各遺跡、諸開発に伴う中島平・宮ノ先・鳥屋平・下原(12)・高野・公文所前・中村中平(13)・増泉寺付近(14)・三尋石・富の平(15)・富士塚・中川・経塚原・樋口(16)・はりつけ原(17)各遺跡等、枚挙に遑がない。



こうした文化財に表れた先人たちの足跡は縄文時代早期まで溯る。立野遺跡・山口遺跡といった縄文時代早・前期の遺跡は主に笠松山麓の比較的標高の高い所に立地している。前期終末では辻垣外・殿原遺跡等扇状地の扇端付近の遺跡で竪穴住居が調査されている。中期の遺跡は伊賀良地区の広範に分布しており、中央自動車道・西部山麓線路線にかかる扇状地上の諸遺跡や下原・公文所前といった段丘上の遺跡がある。殊に北方大原・下原・増泉寺付近遺跡では、該期中葉から後葉の大集落の一面が調査されている。後期中葉から晩期にかけては、茂都計川に面した中村中平遺跡で、配石址・竪穴住居・配石墓等の遺構や土偶・土製耳飾り・石棒・石剣を含む多量の遺物が調査され、不明な点が多かった該期の様相が解明されると期待されている。また、酒屋前・辻垣外・殿原遺跡で断片的な資料ではあるが遺構・遺物が確認される。

弥生時代においても集落立地は基本的には縄文時代と変わらないと考えられるが、前期・中期についてはなお不明である。後期になると遺跡数が増加すると共に調査例も増す。これまで調査された遺跡としては、大東・上の金谷・酒屋前・滝沢井尻・宮ノ先・中島平・中村中平・櫛口・はりつけ原遺跡等がある。該期の集落展開としては、扇状地末端の湧水線及び西方前山から東流する大小河川を利用した水田経営と高位段丘上での陸耕を基盤とするものが考えられる。殿原遺跡ではこれまで90軒にのぼる竪穴住居が調査される等、大規模な集落が営まれていたことが判明している。また、細田北遺跡では標高700mを超える高所から2軒の竪穴住居が発見されており、人口の爆発的な増加とこうした高所にまで生産基盤を拡大するまでに至る生産力の向上を看取できる。

古墳は伊賀良地区では52基が確認されているが、現存するものは9基にすぎない。隣接する竜丘・松尾尾地区に比べ数も少なく、いずれも規模の小さい円墳である。また、該期の集落址の調査例は少なく、中期の上の金谷・富の平遺跡・後期の三壺洲・中島平・中村中平遺跡が調査されているのみである。遺跡数も前時代に比べると著しく減少しており、湧水・湿地を控えた集落の展開が考えられる。中村中平遺跡では、遺跡北側の台地の縁に大名塚古墳が現存し、ほかに消滅したもとして中村孤塚古墳・寺畑古墳・宮原2号古墳があり、これらの築造を担った集落であろう。また、地区内北方地籍には条里が敷かれたとも指摘されており、水田経営の定着した姿を想定する事ができよう。

奈良時代については、具体的な遺構・遺物の調査例は中村中平遺跡のみであり、掘立柱建物址が単独で調査されたのみで、詳細は不明である。地区内には、古代東山道の経路及び「育良駅」の推定地や、荘園を構成する村落の起源等に関連すると思われる箇所があり、重要な役割を果たした地区という事ができる。

平安時代については、その末期に伊賀良庄の名が文書に登場する。その中には中村・久米・川路・殿岡が含まれる事が文献等により明らかにされており、当地区がその中心的な位置を占めていた事が考えられる。当地方における大規模な井水開発の歴史は、この時代に始まるともいわれている。殿原遺跡の調査結果はこうした説をある程度裏付けるものといえる。一方、これまで実施された発掘調査の結果、六反田・滝沢井尻・小垣外・三壺洲・上の金谷・宮の先・公文所前遺跡等地区内のほぼ全域にわたり、集落址の一部が調査されている。伊賀良庄の成立がどこまで溯るかは不明であるが、この時代の集落が前時代よりも増加する事はこの地区の開発が一段と進んだ証左であろう。隣接する山本久米地区には真言宗の古刹光明寺がある。胎内に「保延六(1140)年」の銘をもつ薬師如来坐像がある事から、寺の創建はこれより遡ると考えられ、伊那谷の中ではいち早く中央の文化を取り入れた先進地域の一つであった

と思われる。さらにこの時代には三日市場地籍に須恵器を生産した土器（かわらけ）洞窟跡があり、ここで生産された須恵器が下伊那全域に分布するなど、手工業生産の発達が見られる。

中世においては鎌倉時代には北条時政が伊賀良庄地頭であり、以後一族の江馬氏がこれを継いだ。その地頭代が地区内に居を構えたことは疑いなく、鎌倉末期には荘園を自領化していたことが三浦和田文書に窺える。この時代の文化財としては、藤原様式の流れを汲む鎌倉初期の光明寺の阿弥陀如来坐像（国指定重要文化財）がある。

北条氏の滅亡後、信濃守護職小笠原氏は伊賀良庄を与えられ、その下で伊賀良地区の開発は急速に進んだとされる。地区内の井水の大半はこの時代の開発と考えられ、小笠原氏の勢力伸長の基盤として当地区が大きな役割を果たしたといえる。室町時代中期以降、小笠原氏内訌に伴い松尾城・鈴岡城の支城が各地に築かれ、地区内には下の城跡・桜山城跡・三日市場城跡などがある。

以上、各時代について概観したが、こうした歴史の脈絡の中で、今次調査の成果がどのように位置付けられるかは、本書の内容により明らかにされるといえる。



### III 調査結果

#### A地区

当該地区に於いては前述した如く造成が主たる原因と思われるが、多くの調査地点で表土の下層が礫層で、遺構確認面であるローム層が削平されており一部の箇所のみを調査した。しかし、調査区北側はB地区の状況から北東に急傾斜しており、遺構はなかったと考えられる。

##### 1. 基本層序 (第4図)

調査区南側壁のものである。この箇所は造成等、擾乱を受けていない唯一の場所である。遺構検出面はVII層(ローム層)上層であり、比較的容易に遺構検出ができた。

##### 2. ビット (第5・6図)

ビットのみを検出した。各々の説明は省略する。

#### B地区

当該地区に於いて確認された遺構は下記のとおりである。

・ 竪穴住居址 (SB)	縄文時代中期後葉	12軒
	弥生時代後期	1軒
		計13軒
・ 竪穴状遺構 (SB)	時期不明	1基
・ 方形周溝墓 (SM)	弥生時代後期	1基
・ 埋設土器	縄文時代中期～後期	1基
・ 土坑 (SK)	縄文時代中期～後期	32基
・ ビット		

##### 1. 基本層序 (第4図)

調査区南東側壁(3地点)と北側壁(2地点)で採取した。両者の整合関係は取れない。3地点については下新井沢川の氾濫源に位置しているためと考えられる。2地点についてはA地区と同様、北東に急傾斜し始める箇所にあたる。遺構検出面はそれぞれV・VI層(ローム層)上層である。

## 2. 竪穴住居址 (S B)

## (1) 縄文時代

## ① S B26 (第7図)

検出位置	B X-12	覆土	単層				
重切る	なし	床面	堅固で明確な貼床				
複切られる	なし	住居内	主柱穴	P 1 ~ P 6 6本柱	埋場所	なし	
規模・形状	プラン		円形	周溝	なし	変	状況
	規模 m	(4.7) × (4.4)	入口	不明			
	主軸	N34° E	炉・竈	形状	(石囲炉)		
	壁高 cm	17		規模 cm	75 × 60		
状態	緩やか	設	特記事項	石の抜痕あり			
出土遺物 (第30・31・43図) 深鉢 浅鉢 打製石斧 磨製石斧 石鏃 石匙							
特記事項 南～南東側は削平されており、覆土がほとんどない							
時期	縄文時代中期中葉末～後葉	根拠	出土遺物				

## ② S B27 (第8図)

検出位置	B V-15	覆土					
重切る	なし	床面	堅固で明確な貼床				
複切られる	S M01	住居内	主柱穴	P 1 ~ P 4 4本柱か	埋場所	不明	
規模・形状	プラン		円形に近い隅丸方形	周溝	部分的にあり	変	状況
	規模 m	4.2 × (4.2)	入口	不明			
	主軸	N57° W	炉・竈	形状	(石囲炉)		
	壁高 cm	27		規模 cm	122 × 111		
状態	緩やか	設	特記事項	石の抜痕あり			
出土遺物 (第31・43図) 深鉢 打製石斧 横刃形石器 敲打器							
特記事項 周溝が一部2重にあるので改築の可能性あり							
時期	縄文時代中期後葉	根拠	出土遺物				

③ S B28(第9図)

検出位置	AU-18	覆土				
重切る	なし	床面	不明			
複切られる	なし	住居内施設	主柱穴	不明	埋場所	不明
プラン	不明		周溝	不明		
規模・形状	規模 m		不明	入口	不明	窠
	主軸		不明	形状	(石囲炉)	
形状	壁高 cm	不明	規模 cm	110×97	窠	
	状態	不明	特記事項	副炉あり		
出土遺物 (第31・43・44図) 深鉢 打製石斧横刃型石器磨製石斧 混入品の可能性が高い						
特記事項 炉址のみを検出したため、詳細は不明						
時期	縄文時代中期後葉	根拠	出土遺物			

④ S B29(第9図)

検出位置	AU-15	覆土				
重切る	SK216	床面	堅固で一部を除き貼床あり			
複切られる	なし	住居内施設	主柱穴	P1~P3 4本柱か	埋場所	なし
プラン	隅丸方形		周溝	部分的にあり		
規模・形状	規模 m		4.4×(4.3)	入口	不明	窠
	主軸		N60°W	形状	(石囲炉)	
形状	壁高 cm	34	規模 cm	170×102	窠	
	状態	やや緩やか	特記事項	石の抜痕あり		
出土遺物 (第31・32図) 深鉢ミニチュア土器 打製石斧						
特記事項 ルームマウンド上に住居址があり、北東側はプラン不明						
時期	縄文時代中期後葉	根拠	出土遺物			

## ⑤ S B30 (第10図)

検出位置	AS-24	覆土				
重切る	なし	床面	西側は明確であるが、軟弱であり、東側は不明瞭			
複切られる	SB36 SK222	住居内施設	主柱穴	P1~P6 6本柱か	埋場所 南東壁側 状況 正位で底部なし 34-4	
規模・形状	プラン		円形	周溝		ほぼ全周する
	規模 m		(6.2)×5.9	入口		不明
	主軸		N52°W	炉形状		(石囲炉)
	壁高 cm		24	規模 cm		177×167
状態	やや緩やか	電	特記事項	石の抜痕あり		
出土遺物 (第32・33・34・35図) 深鉢有効鋳付土器 打製石斧横刃形石器磨石						
特記事項						
時期	縄文時代中期後葉	根拠	出土遺物			

## ⑥ S B31 (第11図)

検出位置	AV-27	覆土	床面のみ検出			
重切る	不明	床面	堅固な貼床(検出できた箇所)			
複切られる	不明	住居内施設	主柱穴	不明	埋場所 不明 状況	
規模・形状	プラン		不明	周溝		不明
	規模 m		不明	入口		不明
	主軸		(N25°E)	炉形状		(石囲炉)
	壁高 cm		0	規模 cm		90×(63)
状態	床面のみ	電	特記事項			
出土遺物 (第35図) 深鉢						
特記事項 一部の床面と炉址のみを検出した 柱穴は貼床を除去して確認した						
時期	縄文時代中期後葉	根拠	出土遺物			

⑦S B33(第11図)

検出位置	AP-26	覆土						
重切る	SB34	床面	明確で堅固な貼床					
複切られる	SB32	住居内施設	主柱穴	P1~P4 4本柱	埋	場所	不明	
規模・形状	プラン		隅丸方形	周溝		なし	塼	状況
	規模m		5.75×(5.8)	入口	不明			
	主軸		N28°E	炉形状	(石囲炉)			
	壁高cm		19	規模cm	120×112			
状態	緩やか	特記事項						
出土遺物 (第35・36・44・45図) 深鉢台付土器 打製石斧横刃形石器石鏃								
特記事項								
時期	縄文時代中期後葉	根拠	出土遺物					

⑧S B34(第12図)

検出位置	AS-27	覆土						
重切る	なし	床面	堅固で明確な貼床南東側不明瞭					
複切られる	SB33SK228	住居内施設	主柱穴	P1・P3・P5~8	埋	場所	南東壁側	
規模・形状	プラン		円形	周溝		部分的にある	塼	状況
	規模m		5.6×5.6	入口	不明			
	主軸		N66°W	炉形状	(石囲炉)			
	壁高cm		13	規模cm	145×123			
状態	やや緩やか	特記事項						
出土遺物 (第36・37・45図) 深鉢 打製石斧横刃形石器磨石石鏃								
特記事項								
時期	縄文時代中期後葉	根拠	出土遺物					



㊦ S B36 (第12図)

検出位置	AU-25	覆土			
重切る	S B30	床面	不明瞭		
複切られる	なし	住居内	主柱穴	P 1~P 8	埋場所 不明
プラン	(円形)		周溝	なし	
規模	規模 m (5.8) × (4.9)	施・電	入口	不明	塼
形状	主軸		形状	(石囲炉)	
	壁高 cm		規模 cm	不明	
	状態		特記事項		
出土遺物 (第37図) 深鉢					
特記事項 S B30の調査中に確認したため、調査手順が逆になってしまった					
時期	縄文時代中期後葉	根拠	出土遺物		

㊦ S B37 (第13図)

検出位置	AN-28	覆土			
重切る	なし	床面	不明瞭		
複切られる	S B38・40	住居内	主柱穴	不明	埋場所 不明
プラン	(円形)		周溝	なし	
規模	規模 m 不明	施・電	入口	不明	塼
形状	主軸		形状	(石囲炉)	
	壁高 cm		規模 cm	80 × (60)	
	状態		緩やか	特記事項	
出土遺物 (第37・38図) 深鉢台付土器					
特記事項 1/2が造成の削平により消失している					
時期	縄文時代中期後葉	根拠	出土遺物		

⑪ S B38(第13図)

検出位置	AO-29	覆土							
重切る	SB37	床面	堅固						
複切られる	SK225	住居内施設	主柱穴	不明	埋	場所	不明		
規模・形状	プラン (円形)		周溝	なし		塼	状況		
	規模 m		不明						
	主軸		N45°W						
	壁高 cm		12						
状態	やや緩やか		炉形状	(石囲炉)					
		規模 cm	80×60						
		特記事項	石の抜痕あり						
出土遺物 (第38・45図) 深鉢 打製石斧									
特記事項 3/4以上が造成の削平により消失しており、詳細は不明									
時期	縄文時代中期後葉		根拠	出土遺物					

⑫ S B40(第14図)

検出位置	AD-29	覆土	図版参照						
重切る	SB37	床面	明確で堅固な貼床						
複切られる	SK226・233	住居内施設	主柱穴	P1~P3		埋	場所	不明	
規模・形状	プラン (円形)		周溝	部分的			塼	状況	
	規模 m		(5.3)×						
	主軸		N75°W						
	壁高 cm		27						
状態	やや緩やか		炉形状	(石囲炉)					
		規模 cm	(145)×						
		特記事項	石の抜痕あり						
出土遺物(第38・45・46図) 深鉢 打製石斧凹石磨石石鏃									
特記事項									
時期	縄文時代中期後葉		根拠	出土遺物					

## (2)弥生時代

## ①S B32 (第14図)

検出位置	AP-27	覆土	単層	
重切る	SB33・37	床面	全体的に堅固な貼床	
複切られる	なし	住居内施設	主柱穴 P1~P3	
プラン	(隅丸方形)		周溝	なし
規模	規模 m (3.7)×3.6		入口	不明
主軸	N84°W		炉形状	土器埋設炉
	壁高 cm 20			規模 cm 30×20
形状	状態 緩やか	特記事項		
出土遺物 (第38・46図)				
壺 横刃型石器				
特記事項				
時期	弥生時代後期	根拠	出土遺物	

## 3. 竪穴状遺構 (SB)

## ①S B35 (第15図)

検出位置	AL-25	覆土	
重切る	なし	床面	
複切られる	なし	出土遺物 (第38・46図)	
プラン	不定形	深鉢	
規模	規模 m (3.7)×3.6	打製石斧 磨石	
主軸	不明	特記事項	
	壁高 cm 59	竪穴状遺構としたが、土坑の可能性ある。	
形状	状態 やや緩やか		
時期	縄文時代中期後葉か	根拠	出土遺物

#### 4. 方形周溝墓 (SM)

##### ①SM01 (第15図)

検出位置	BW-15	主 主軸 形態 覆土 施設 土橋 墳丘 の 他	規模 m	不明
重切る	SB27		主軸	不明
複切られる	なし		形態	不明
周溝規模	規模 m 9.8×(4.8)		覆土	不明
主軸	(N65°W)		施設	不明
形態	逆台形		土橋	不明
覆土	(方形)		墳丘	不明
幅	cm 50~145			
深	cm 20~38			
断面形	逆台形			
出土遺物 (第39図) 縄文時代後期初頭の土器が出土しているが、 混入品と考えられる。			特記事項	
時期	弥生時代後期		根拠	周囲遺構分布状況

#### 5. 埋設土器

##### ①埋設土器1 (第15図)

AH-12で検出された。周囲に関連する遺構等が確認できなかったため、埋設土器とした。底部を下にして埋設されており、口縁部を欠く。頸部31cm・胴部33cm・残存高36cmを測る。用途は埋葬施設とも考えられるが、詳細は不明である。出土遺物より縄文時代中期後葉から後期に位置付けられる。

#### 6. 土坑 (SK)

No	図No	検出位置	規模(長×短×深)cm	形態	覆土	重複	時代・時期	出土遺物	備考
199	16	BV-13	100 × 86 × 60	円形			縄文中期		
200	16	BY-09	67 × 58 × 40	円形			縄文中期後葉	深鉢	
201	16	AA-10	79 × 65 × 50	円形			縄文中期後葉	深鉢	
202	16	BY-12	(73) × (60) × 38	円形			縄文中期	深鉢	
203	16	BC-13	84 × 688 × 100	楕円形					
204	16	AC-15	98 × 88 × 60	円形			縄文中期後葉		

№	図№	検出位置	規模(長×短×深)cm	形態	覆土	重複	時代・時期	出土遺物	備考
205	16	AC-16	128 × 102 × 40	円形			縄文中期		
206	16	AB-16	85 × 68 × 113	楕円形			縄文中期中葉末	深鉢	
207	16	AB-17	(128) × 110 × 80	楕円形			縄文中期中葉末	深鉢 打製石斧	
208	17	AB-14	126 × 122 × 123	円形			縄文中期中葉末	深鉢	
209	17	AC-19	114 × (50) × 46	不定形			縄文中期	深鉢	
210	17	AD-19	(63) × (57) × 12	不定形			縄文中期中葉末		
211	17	AH-20	126 × 83 × 54	楕円形			縄文中期中葉		
212	17	AI-19	113 × 108 × 35	円形			縄文初期頭	打製石斧	
213	17	AP-17	143 × 105 × 55	楕円形					
214	17	AR-15	120 × 110 × 55	楕円形			縄文中期中葉末		
215	17	AR-18	100 × 80 × 81	不定形			縄文中期	群 打製石斧 群 打製石斧	
216	18	AR-19	153 × 123 × 73	楕円形			縄文中期中葉末	深鉢	
217	18	AS-15	145 × 80 × 50	不定形			縄文中期		
218	18	AS-18	(128) × (80) × 50	不定形			縄文中期中葉末	深鉢 打製石斧	
219	18	AT-18	145 × (110) × 42	不定形			縄文中期中葉末	深鉢 打製石斧	
220	18	AT-19	143 × 118 × 78	楕円形			縄文中期中葉末	深鉢	
221	18	AS-22	113 × (58) × 27	不定形			縄文中期中葉末	深鉢	
222	18	AT-27	157 × 85 × 87	楕円形			縄文中期中葉末	深鉢 打製石斧	
223	18	AS-26	105 × 86 × 70	不定形			縄文後期初頭	深鉢	
224	19	AR-28	145 × 125 × (48)	楕円形			縄文後期中葉末	深鉢	
225	19	AM-28	(155) × 155 × 80	不定形			縄文中期中葉末	深鉢	
226	19	AO-29	160 × (120) × 102	楕円形			縄文中期中葉末	深鉢	
227	19	AQ-29	150 × 130 × 94	楕円形			縄文中期中葉末		
228	19	AO-29	123 × 90 × 33	楕円形			縄文中期中葉末	深鉢	
229	19	AS-27	99 × 78 × 53	円形			縄文中期中葉末	深鉢	
230	19	AP-28	110 × 90 × 93	楕円形					

## 7. ビット (第20～28図)

各遺構についての説明は省略し、遺構図のみ掲載する。

## 8. 土層観察表

遺構名	層	JIS標準色票	土壌色	土性	しまり	粘性	備 考
SB26 炉	1	10YR3/3	暗褐色土	SiCL	かなりあり	かなりあり	
	2	10YR4/4	鈍い黄褐色土	SiCL	かなりあり	かなりあり	
	1	10YR4/3	鈍い黄褐色土	SiC	あり	あり	炭化物が2%混じる
	2		焼土				
SB27 炉	1	10YR4/2	灰黄褐色土	SiC	あり	あり	粒子状の焼土が5%混じる
	2		焼土				
SB29 炉	1	10YR4/2	灰黄褐色土	SiC	あり	あり	
SB30埋壘	1	10YR3/3	暗褐色土	SiCL	あり	ややあり	炭化物3% 10YR6/8(明黄褐色土)が5%それぞれ混じる
	2	10YR4/4	褐色土	SiCL	あり	ややあり	
SB31 炉	1	10YR4/3	鈍い黄褐色土	SiC	あり	ややあり	焼土粒2%混じる
	2	10YR4/4	褐色土	SiC	あり	ややあり	
SB34埋壘	1	10YR4/3	鈍い黄褐色土	SiCL	なし	ややあり	焼土粒3% 10YR6/6(明黄褐色土)がブロック状に7%混じる
	2	10YR4/3	鈍い黄褐色土	SL	ややあり	なし	
	3	10YR5/4	鈍い黄褐色土	SiCL	あり	ややあり	
SB36 炉	1		焼土				
SB37 炉	1		焼土				
	2	7.5YR4/6	褐色土	SiCL	なし	あり	
SB38 炉	1		焼土				
	2	10YR5/4	鈍い黄褐色土	SiCL	なし	あり	
SB40 炉	1		焼土				
	2						炭、灰、焼土粒
SB32 炉	1	10YR5/6	黄褐色土	SiCL	ややあり	あり	10YR3/1(黒褐色土)が20%混じる 焼土粒が5%混じる 10YR3/1(黒褐色土)が20%混じる 10YR5/6(黄褐色土)、焼土粒がそれぞれ5%混じる
	2	10YR5/6	黄褐色土	SiCL	ややあり	あり	
	3	10YR3/1	黒褐色土	SiCL	なし	ややあり	
	4	10YR3/1	黒褐色土	SiCL	なし	ややあり	
SM01	1		造成土				
	2		造成土				
	3	10YR3/1	黒褐色土	SiC	あり	あり	10YR3/1(黒褐色土)が40%混じる
	4	10YR6/6	明黄褐色土	HC	あり	あり	
埋設土器1	1	10YR4/2	灰黄褐色土	SiC	あり	あり	炭化物1%混じる
	2	2.5Y5/4	黄褐色土	SiC	あり	ややあり	



## IV まとめ

今次調査の結果は以上のとおりであるが、平成8年度Ⅲ次調査分も含めて（飯田市教委 1999）考察したい。

### 1. 三尋石遺跡に於ける縄文時代中期後葉の土器様相（挿図1）

本遺跡の前・今次調査に於いて縄文時代中期後葉期の良好な資料が出土している。よって本遺跡出土土器の編年を含めた様相を概略ではあるが述べてみたいと思う。

当地方の該期土器編年は各氏・各方面より検討されており、ほぼ大枠で完成しつつある。筆者も僅かながら「増泉寺付近遺跡」（飯田市教委 1996）・「北方大原遺跡」Ⅱ（飯田市教委 1995）の各報告書で検討してきておりここではその経過は省略するが、本遺跡及び他遺跡の調査所見より、若干の私見を加えてみたい。なお、分類については従来の土器型式及び型式学的特徴を基とし、各遺構の重複関係も参考とした。また、調査方法の不備のため、住居址出土遺物が明確に一括資料としては断定できないため、同住居址出土土器が必ずしも同時期ではないことを断っておく。

中期中葉末から後葉に於いては現時点では明確に区分ができない状況にある。これらについては「増泉寺付近遺跡」に詳しい（飯田市教委 1996）。また、各土器群の型式分類については「大原遺跡」に詳しい（飯田市教委 1999）。Ⅲ・Ⅳ次調査出土土器に於いては所謂「細線文土器」型式がほとんどであり、型式ヴァリエーションは少ない。

次段階（Ⅱ期）になると型式が増す。各型式の詳細は割愛するが、前段階からの「細線文土器」型式（5・6）（以下の数字・アルファベットは挿図1「三尋石遺跡に於ける縄文時代中期後葉の土器様相」中の土器を示す）、「下伊那タイプ」型式（7）、東海地方の型式である「中富式系」型式（8・9）がある。本遺跡からは出土していないが、頸部に無文帯を持つ「加曾利EⅡ式系」型式（A）等がある。これらの型式は互いに影響を及ぼし合い、例としては「下伊那タイプ」型式の肩部に見られる入組文は、「中富式系」型式からのものであると言われている。また、各型式の折衷もある。8は「中富式系」型式としたが、胴部の形式及び文様構成は「加曾利EⅡ式系」型式である。その逆の土器もある。Ⅲ期は従来の編年をⅢa・Ⅲb・Ⅲcと3細分したいと思う。細分の主たる根拠は該期を代表する型式である、「唐草文」型式の変化と各型式の土器に見られる地文である。

「唐草文土器」は長野県松本平周辺及び諏訪盆地周辺・伊那谷北部（上伊那）を中心とする土器型式であるが、その影響が当地域まで及んでいる。これら中心の地域では、胴部に施文される大柄渦巻文（以下唐草文とする）が出現当初は沈線にてなされていたが、当地域では当初から隆帯にて施文される。しかし初期（Ⅲa）は完全な唐草文でなく、隆帯の懸垂文の末端が釣針状になった程度や、「下伊那タイプ」型式や「加曾利EⅡ式系」型式に多く見られる口縁部文様帯内の横位渦巻区画文が下垂した程度のものである（10）。次段階（Ⅲb）になると、器面に大胆に唐草文が施文され、その間に沈線及び綾



杉文が充填される(13~15)。この型式の形式は、無須胴張の所謂「樽形」が典型であるが、胴張で頸部のあるもの(14)、把手のあるもの(13・15)、と基本形ではあるが、細部での形式ヴァリエーションは多い。次段階(Ⅲc)に至り、それまでの隆帯唐草文が沈線化する(22・23)。また「胴張」という基本形式から、「加曾利EⅡ式系」型式の伝統であるキャリパー形式にも施文される(22・23)。一形式一文様という規律が崩れていく。所謂、「手抜き方向性」と捉えられる。

地文の変化は、「加曾利EⅢ式」がⅢ式に至り口縁部楕円区画文が出現したことに伴い、当地域でも口縁部楕円区画文を有する型式である「加曾利EⅢ系」型式が出現した。この型式土器はⅢb期に出現し、中期終末まで残る型式であるが、Ⅲb期に於いては区画内は綾杉文が充填されていたが、Ⅲc期に至り、縄文も施文されるようになる。以上の状況より、Ⅲ期を細分した。細分した各期の様相は、以下記述する。

Ⅲa期は、本遺跡で出土しているものは前述した「唐草文土器」型式(10)と前段階と同系統の「咲畑系」型式(11・12)がある。出土していないが当地域全体の様相では前段階からの「下伊那タイプ」型式と「加曾利EⅡ式系」型式の折衷様式がある(B)。

Ⅲb期は「唐草文土器」型式(13~16)・「加曾利EⅢ式系」型式(17~19)・東海系の「神明式系」型式(20・21)がある。「神明式系」型式は神村透氏が「機状突帯付土器」としているものであるが(神村 1990)、今回は「神明式系」型式とする。本遺跡では確認されていないが、Ⅱ期の「加曾利EⅡ式系」型式に見られる口縁部文様の横位渦巻区画が多少意匠を変えて復活する。Ⅱ期では地文が縄文であったが、該期は綾杉文となる。

Ⅲc期では新たな型式はなく、前段階の型式を踏襲するが前述した如く、地文が縄文へと変化する。次期は結節縄文が施される土器群であり、従来は2期に分類されていた。しかし、その型式変化が基本的に地文の縄文の有無のみという点で1期2細分とし、Ⅳa・Ⅳb期としたい。

Ⅳa・Ⅳb期共に型式はほぼ共通である。前段階からの型式である、「加曾利EⅡ式系」型式(30)・口縁部の区画文が「加曾利EⅡ式系」型式の横位渦巻区画文の省略形と考えられるものと「加曾利EⅢ式系」型式に見られる楕円区画文が施文された折衷型式(28・31)、形式は「唐草文土器」型式に見られる、胴が張り口縁部が緩やかに外反し、逆U字状の区画の中に結節縄文が施文される型式(33・C)、形式はキャリパー形で頸部まで無文帯となり、胴部に結節縄文が施文される型式(29)、「唐草文土器」型式も該期まで存在する(D)。Ⅳb期に於いては「加曾利EⅣ式」に見られる磨消縄文系の型式も見られる(34)。

以上のように該期の様相を概略ながら述べてみたが、まだまだ不十分な点が多い。過去、先学が言い尽くしてきたことであるが、当地はその地理的条件から隣接する各地域の土器型式が流入しており、その分類は非常に困難である。しかし、その分析・総合が不可欠であると思われ、各型式の把握・型式間の関係を見極めることが肝要と考える。

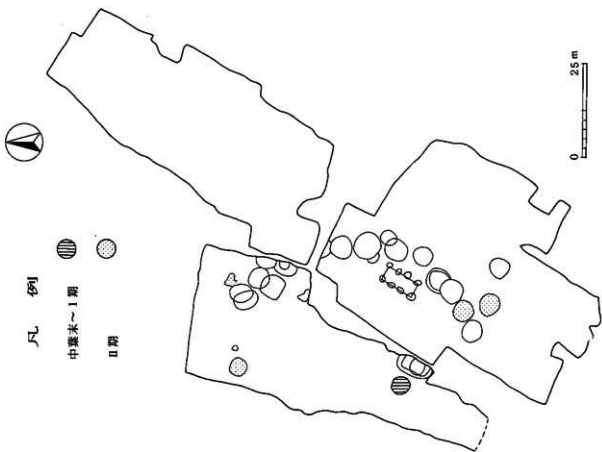
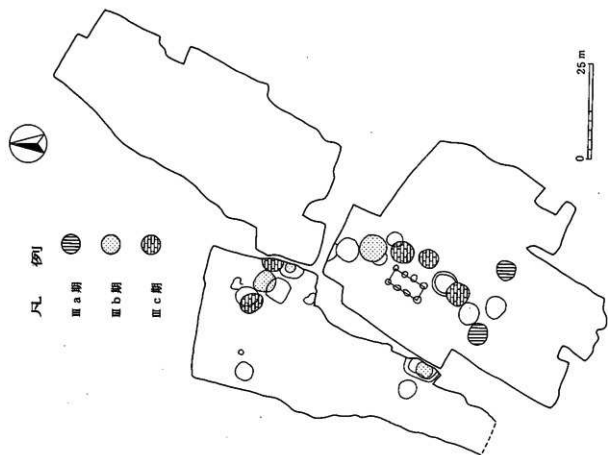
## 2. 縄文時代中期後葉期の集落について(挿図2・3)

Ⅲ・Ⅳ次調査地点は、扇状地の扇尖部に位置し、北に細田沢川・南に下新井川が流れる極めて小規模

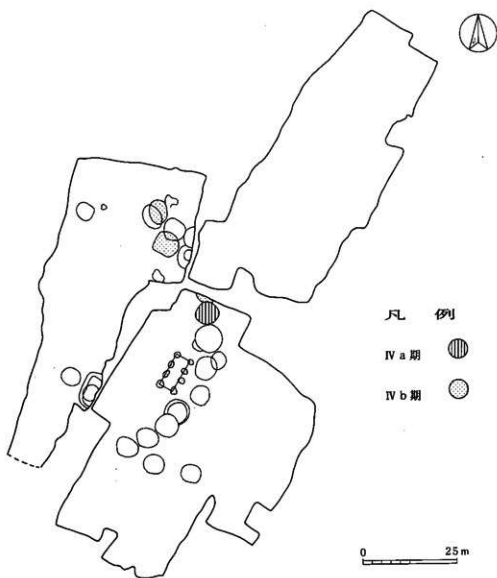
中葉末	地文	
I		
II		
III <sub>a</sub>		
III <sub>b</sub>		
III <sub>c</sub>		
IV <sub>a</sub>		
IV <sub>b</sub>		
IV <sub>c</sub>		
IV <sub>d</sub>		
後期		

押図1 三身石室跡に於ける縄文時代中期後葉の土器採相





挿圖2 縄文時代中期後葉集落変遷図 (1)



挿図2 縄文時代中期後葉集落変遷図 (2)

な田切地形上に立地する。現にⅢ次調査区南西側では下新井川の氾濫源と思われる箇所が、今次調査区ではA・B地区北側が礫層となっており、細田沢川の影響と考えられる。この幅約90mの帯状の地域が、居住域として利用されていたようである。以下、本遺跡の中心となる縄文時代中期後葉に於ける集落の様相を考えてみたい。

前項の土器様相より見れば、本遺跡は縄文時代中期後葉期全てに亘り居住していたようである。このことは該期の集落が比較的多い当地域においても極めて稀で、貴重な調査例である。しかし、集落の全域を調査したとはいえず、また、造成により破壊された遺構が数多く予想されるため、あくまでも推測の域でしかないが、当時の中核的な集落だったと考えられる。以下、前述の土器様相の時期区分で住居址を中心とした集落の変遷を追ってみたい。なお、Ⅲ次調査の報告書と異なっているものがあるが、以下を最終判断としたい。

中葉末からⅠ期はS B26が相当する。該期は炉址に特徴がある。竪穴から人頭大の礫を円形に配列す

る石組炉が多く、その規模は後葉期中比較的小さい。中葉期の伝統を引くものと考えられる。

II期はS B 9・10・29・31が相当する。該期より埋壘が見られるようになる(S B 10)。炉址は大型化し、所謂「切炬燵」状になる。

III期は3細分したが、III a期はS B 07・08、III b期はS B 20・27・34・38、III c期はS B 11・17・18・30・40が相当する。該期が集落として最も大型化した段階と考えられる。埋壘も多く(S B 10・20・30・34)、炉址に於いても副炉を持つものも見られる(S B 08・20・28)。S B 28はIII期と位置付けてよいであろう。

IV期は前期に比して小規模となるが、掘立柱建物址が確認されている。IV a期はS B 25、IV b期はS B 24・33・36・S T 01がある。

以上概略で本遺跡に於ける集落の変遷を述べてみたが、集落を構成する広場・墓域等、集落域以外の様相は触れることができなかつた。また、本遺跡ではIII期が最も充実した集落を形成していたが、他遺跡との比較をすることにより、より興味深い事実が明らかになるとと思われる。今後の課題としたい。

以上、縄文時代中期後葉期を中心として考察したが、担当者の努力不足で十分な考察ができなかつたことを紙面を借りてお詫びしたい。

#### 引用参考文献

- 飯田市教育委員会 1995 『北方大原遺跡』 II  
飯田市教育委員会 1996 『増泉寺付近遺跡』  
飯田市教育委員会 1996 『三尋石遺跡 三尋石遺跡 (II)』  
飯田市教育委員会 1999 『大門原遺跡』  
飯田市教育委員会 1999 『三尋石遺跡』 III  
神奈川考古同人会 1980・81 「シンポジウム縄文中期後半の諸問題」 『神奈川考古』 10・11  
神村 透 1978 「結節縄文をつけた一群の土器」 『中部高地の考古学』  
神村 透 1990 「縄文中期後半の橋状突帯付土器」 『伊那』 38-5  
神村 透 1997 「下伊那と美濃川合遺跡のつながり」 -副炉つき石囲い炉等- 『伊那』 45-4  
(財)長野県史刊行会 1988 『長野県史』 1-4  
末木 健 1978 「伊那谷中部縄文中期後半の土器群とその性格」 『信濃』 30-4  
中央道遺跡調査団 1973 『長野県中央道報文高森町その2』  
増子康真 1982 「長野県伊那中南部地域の縄文中期後半土器の変遷」 『古代人』 39  
増子康真 1986 「東海西部沿海地域縄文中期土器型式の検討」 『知多古文化研究』 2  
八木光則 1976 「縄文中期集落の素描」 『長野県考古学会誌』 25-26  
米田明訓 1980 「南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年」 『甲斐考古』 17-1





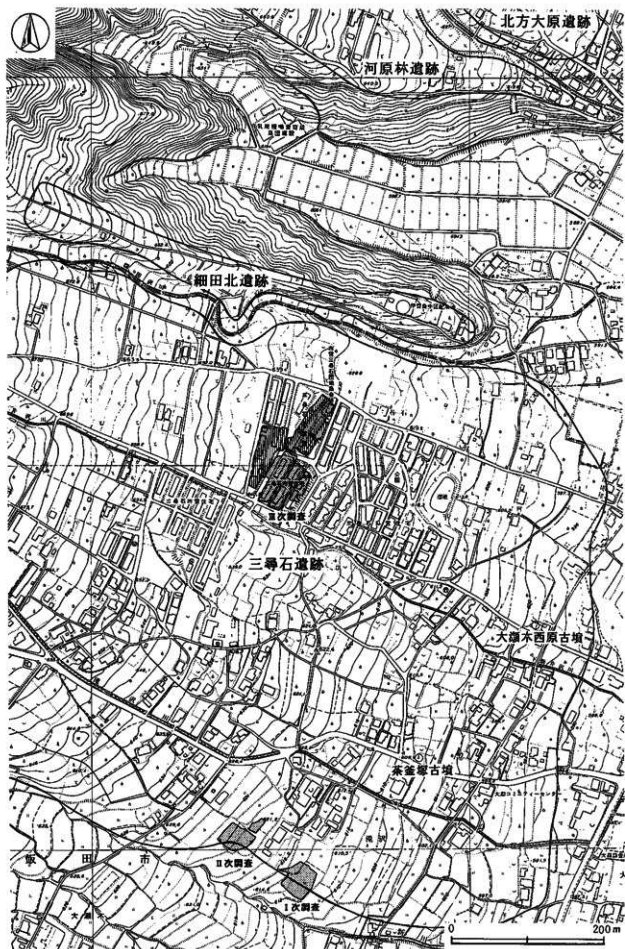
版



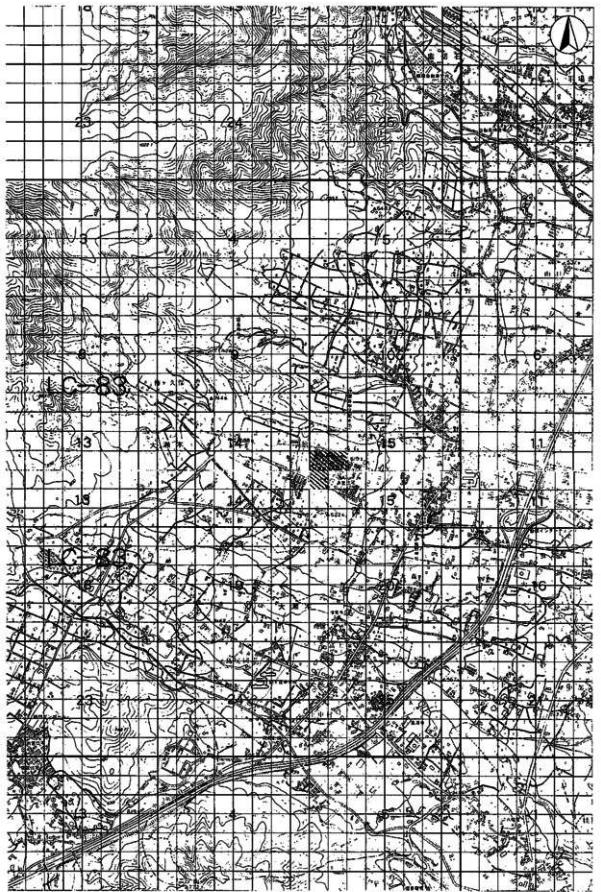




第1図 調査遺跡及び周辺遺跡位置図



第2図 調査位置図及び周辺地図



第3図 基準メッシュ区画調査位置図

639.00

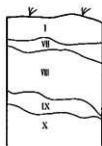
638.00

637.00

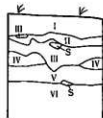
636.00

635.00

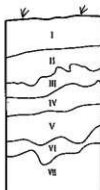
634.00



3 地点



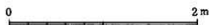
2 地点



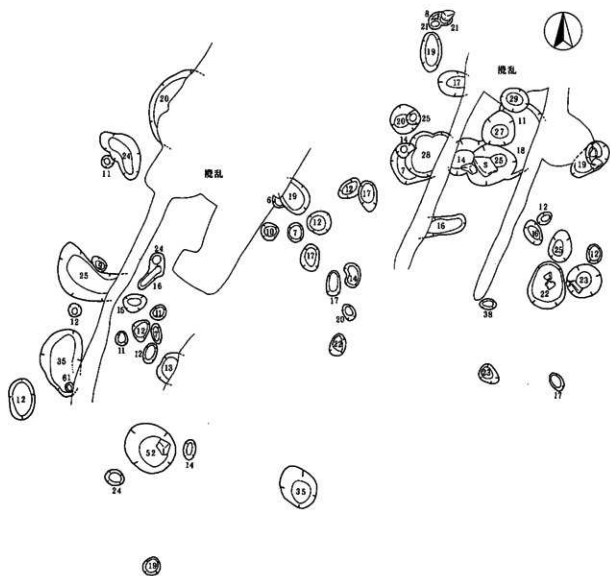
1 地点

- I. 埋立土
- II. 10Y R3/2 黒褐色S i C 粘性なし、いしまりややあり
- III. 10Y R2/1 黒色S i C 粘性なし、しまりややあり
- IV. 10Y R3/3 暗褐色S i C L 粘性ややあり、しまりややあり
- V. 10Y R4/4 褐色S i C L 粘性あり、しまりあり  
(IV層が10%混じる等～人糞大の跡が混じる)
- VI. 10Y R5/6 黄褐色S i C L 粘性あり、しまりあり  
(等～人糞大の跡が混じる)
- VII. 10Y R3/1 黒褐色S i C 粘性ややあり、しまりあり
- VIII. 10Y R3/2 黒褐色S i C 粘性ややあり、しまりあり
- IX. 10Y R6/6 明黄褐色H C 粘性あり、しまりあり  
(V層が40%混じる、漸移層)
- X. 10Y R6/6 明黄褐色H C 粘性あり、しまりあり

- I. 埋立土
- II. 旧耕土
- III. 10Y R3/1 黒褐色S i C 粘性ややあり、しまりあり  
(10Y R4/4褐色が10%混じる)
- IV. 10Y R4/4 褐色S i C 粘性ややあり、しまりあり  
(III層が7%混じる)
- V. 10Y R3/3 暗褐色S i C 粘性ややあり、しまりあり  
(下層が5cm混入混じる)
- VI. 7.5Y R5/8 明褐色H C 粘性かなりあり、しまりかなりあり  
(V層が40%混じる、上層2～5cm混入混じる、漸移層)
- VII. 7.5Y R5/8 明褐色H C 粘性かなりあり、しまりかなりあり

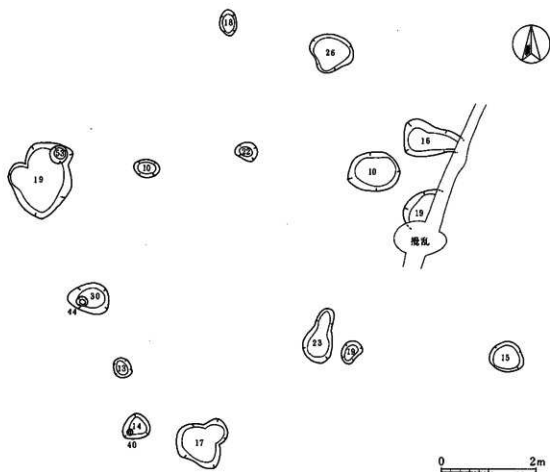


第4図 基本層序

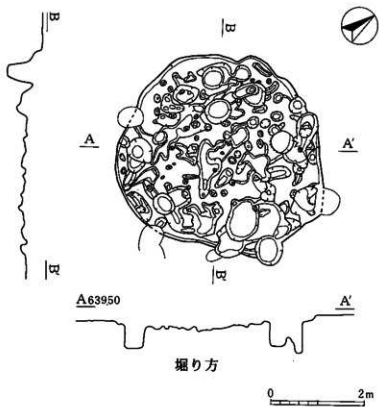
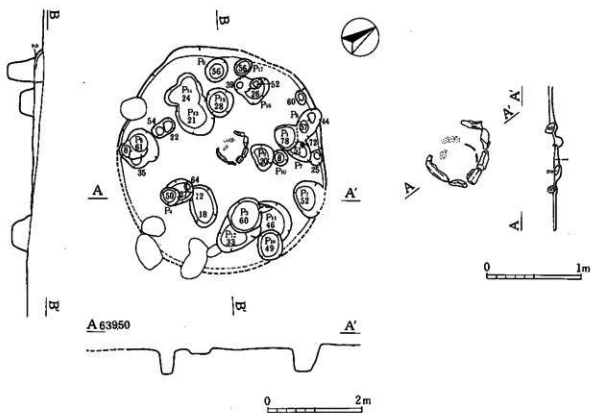


30

第5図 A地区 ビット (1)

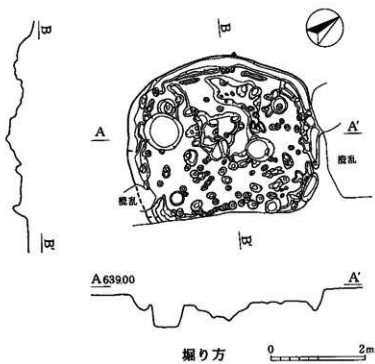
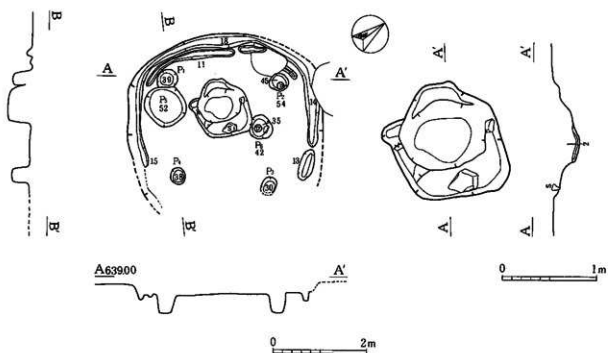


第6図 A地区 ビット (2)

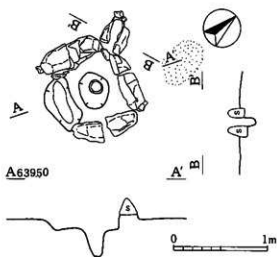


第7図 S B 26

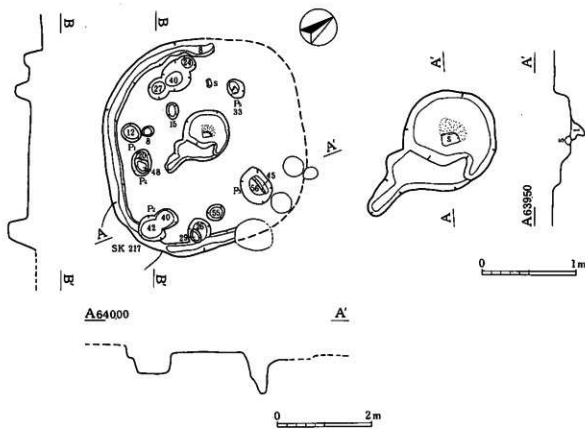




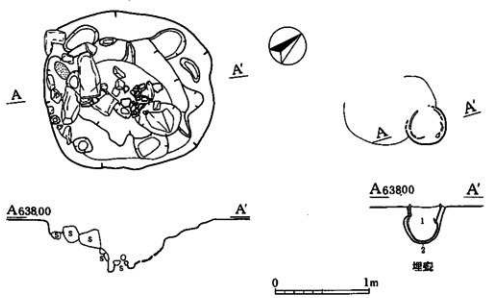
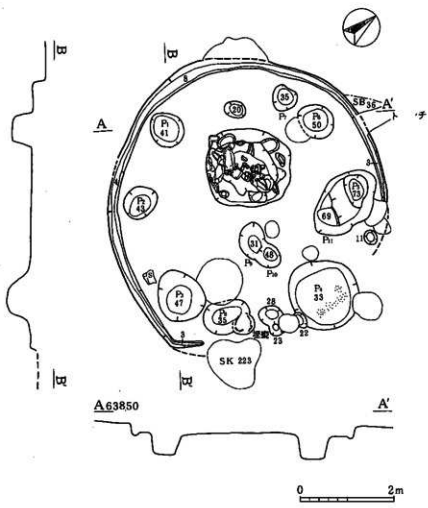
第8図 SB27



SB 28 炉

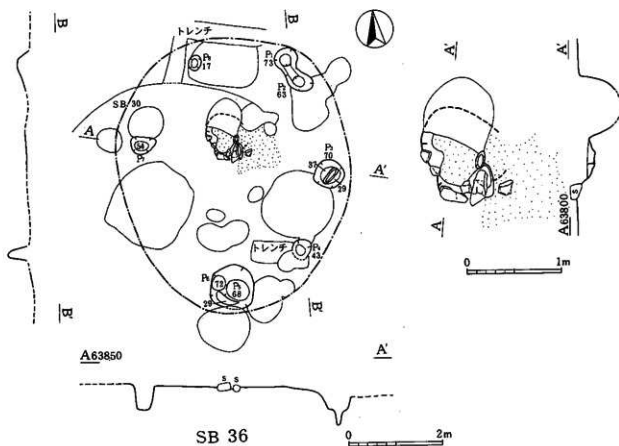
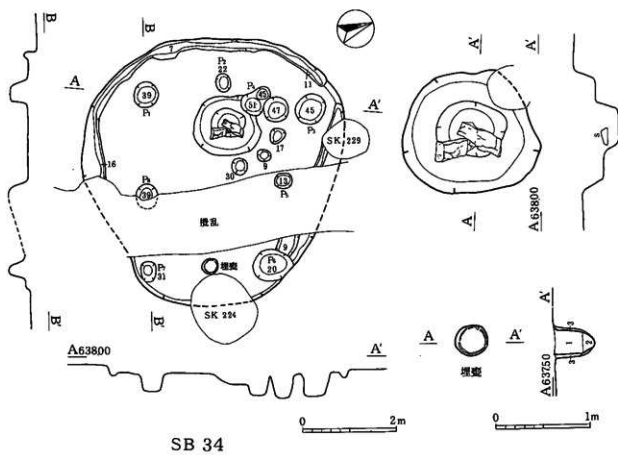


SB 29

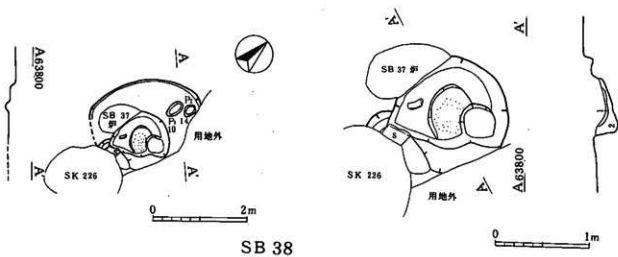
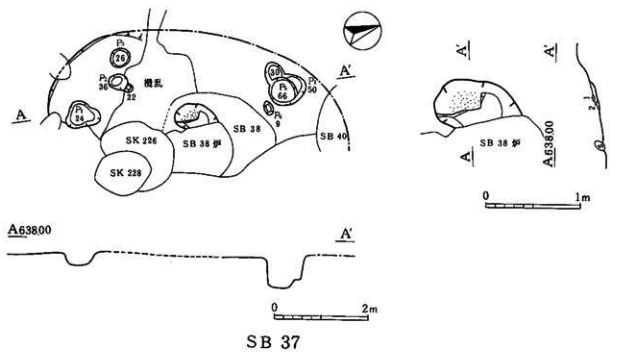


第10圖 SB30

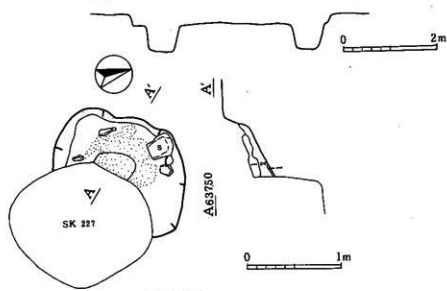
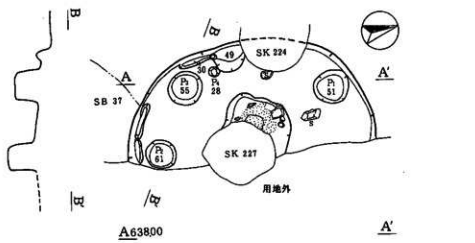




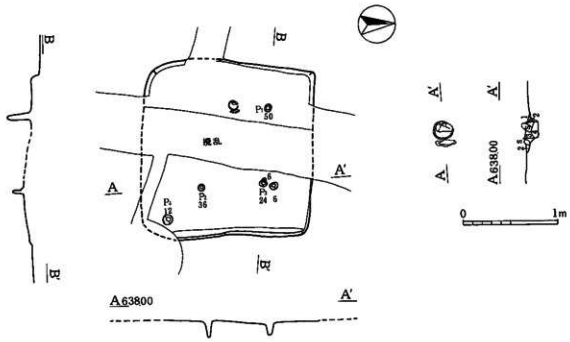
第12図 SB 34・36



第13図 SB37・38

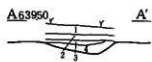
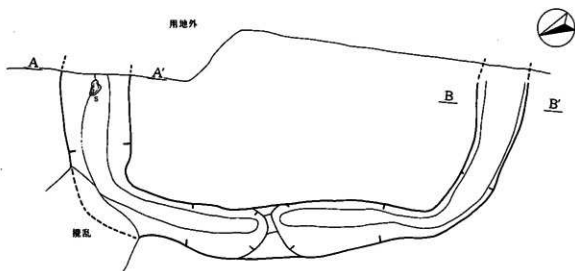
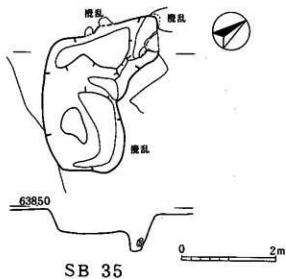


SB 40

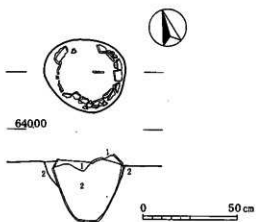
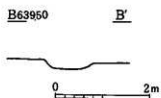


SB 32

第14図 SB 40・32



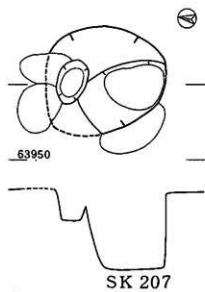
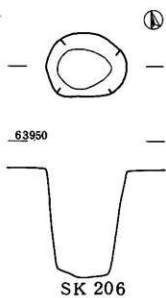
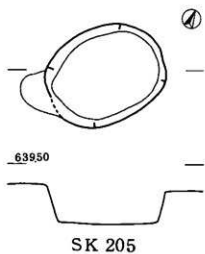
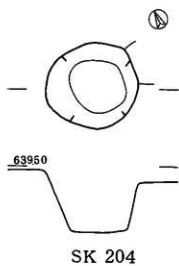
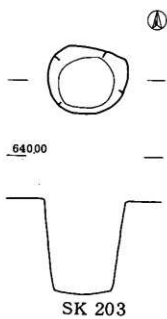
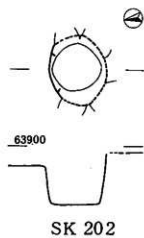
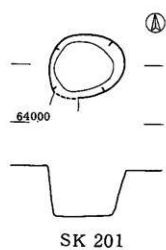
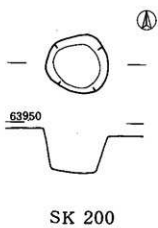
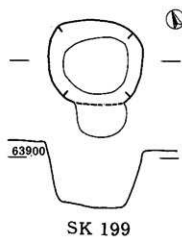
SM 01



埋設土器

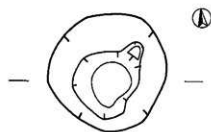
第15圖 SB35・SM01・埋設土器1





0 1m

第16圖 SK 199~207



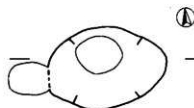
63950

SK 208



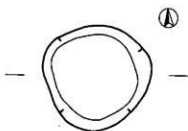
63950

SK 209 · 210



63950

SK 211



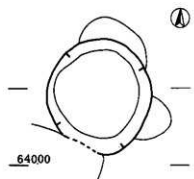
63950

SK 212



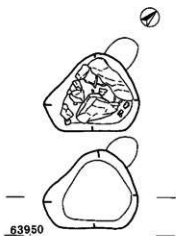
64000

SK 213



64000

SK 214

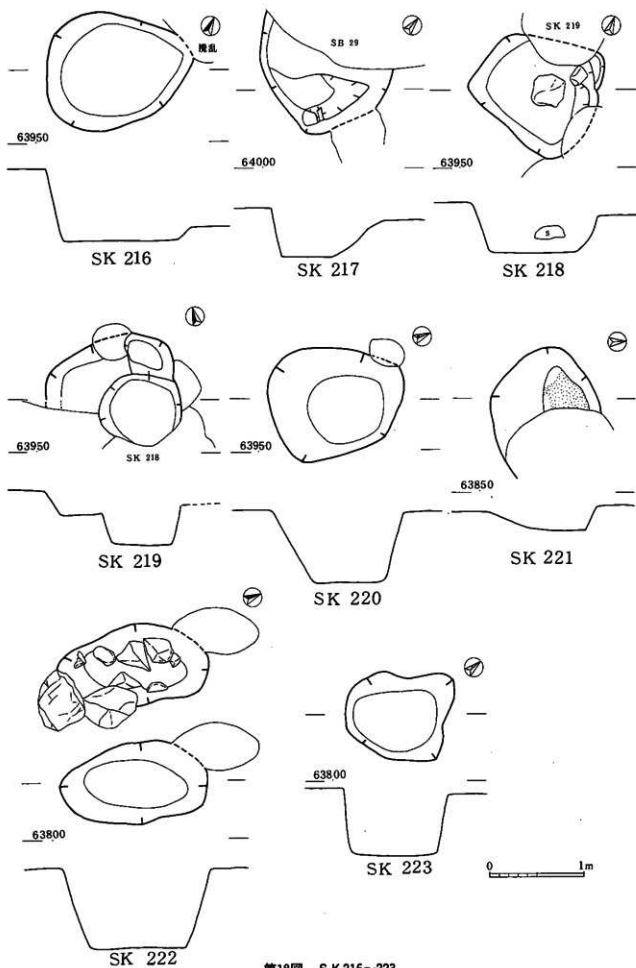


63950

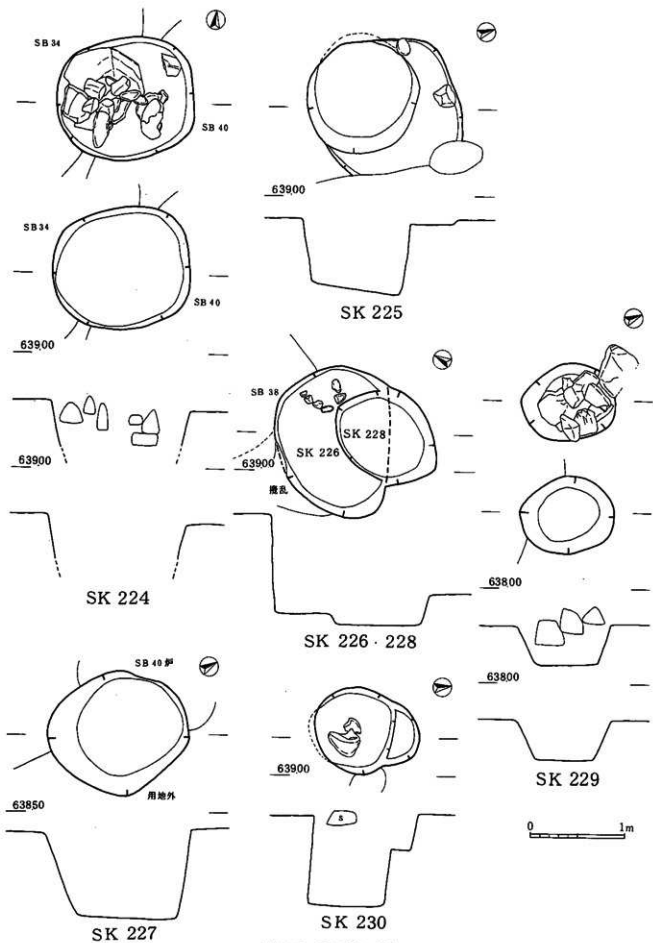
SK 215

0 1m

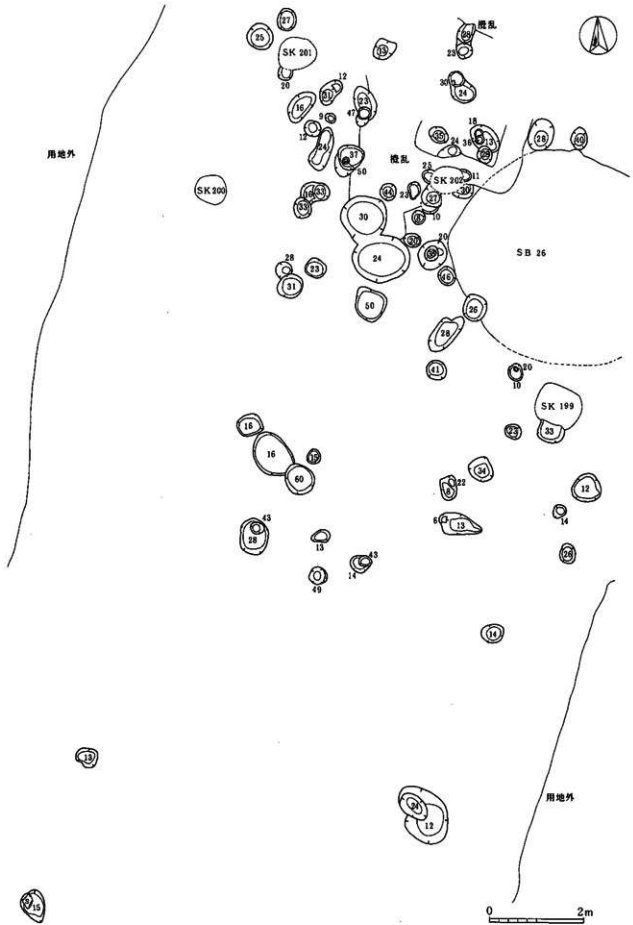
第17圖 SK 208~215



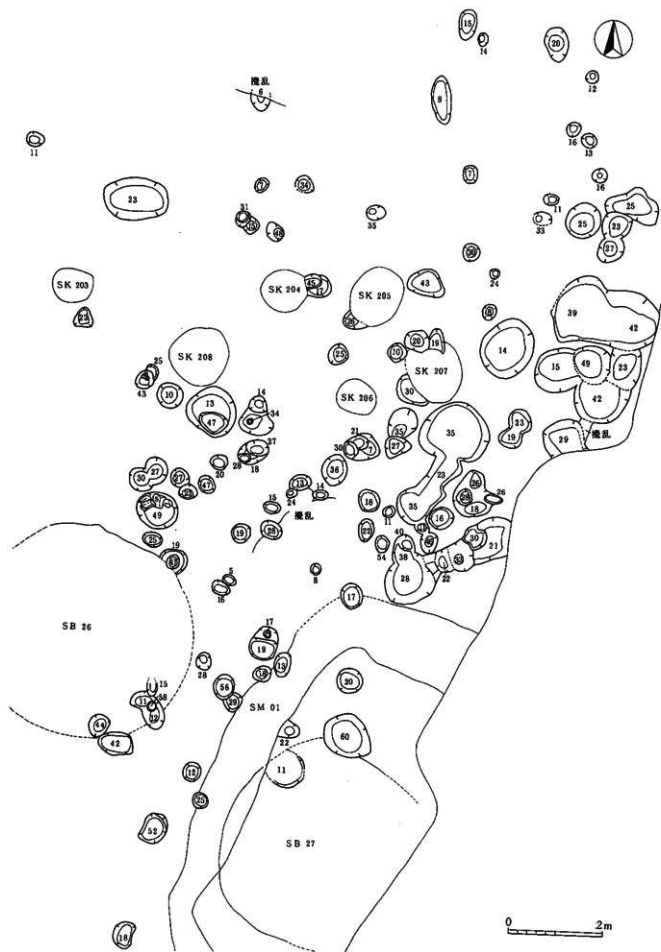
第18圖 SK 216~223



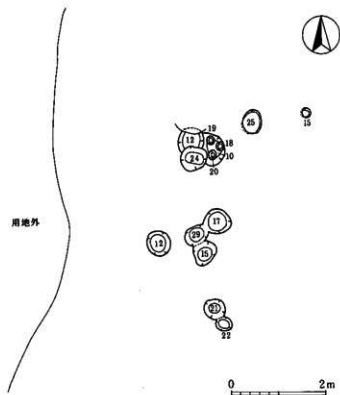
第19圖 SK 224~230



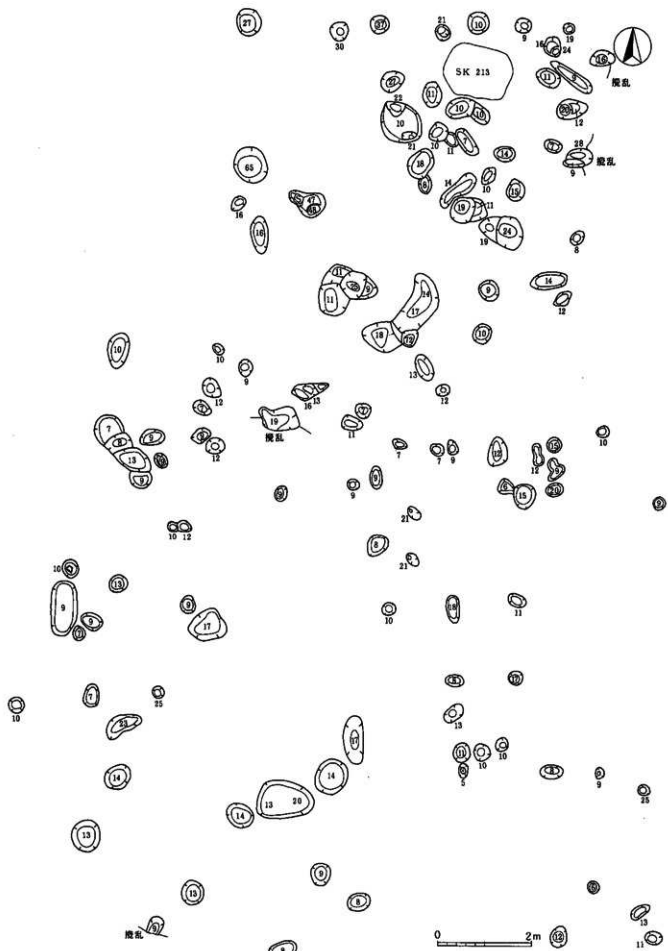
第20図 B地区 ピット (1)



第21図 B地区 ビット (2)

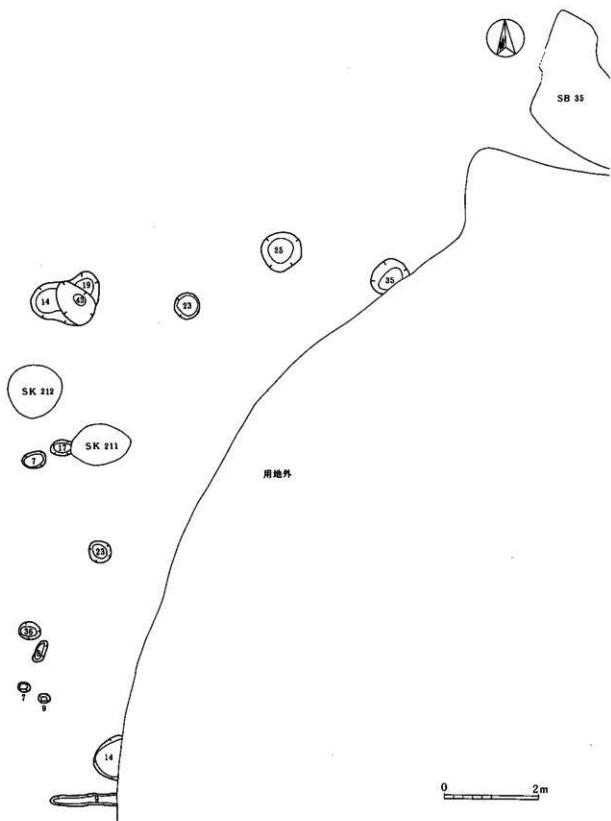


第22図 B地区 ピット (3)

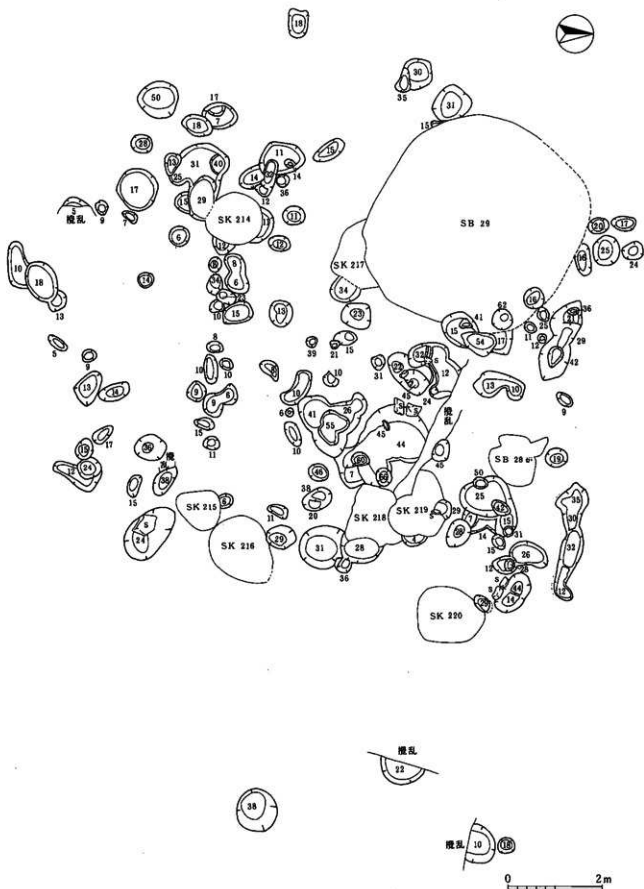


第23図 B地区 ピット (4)

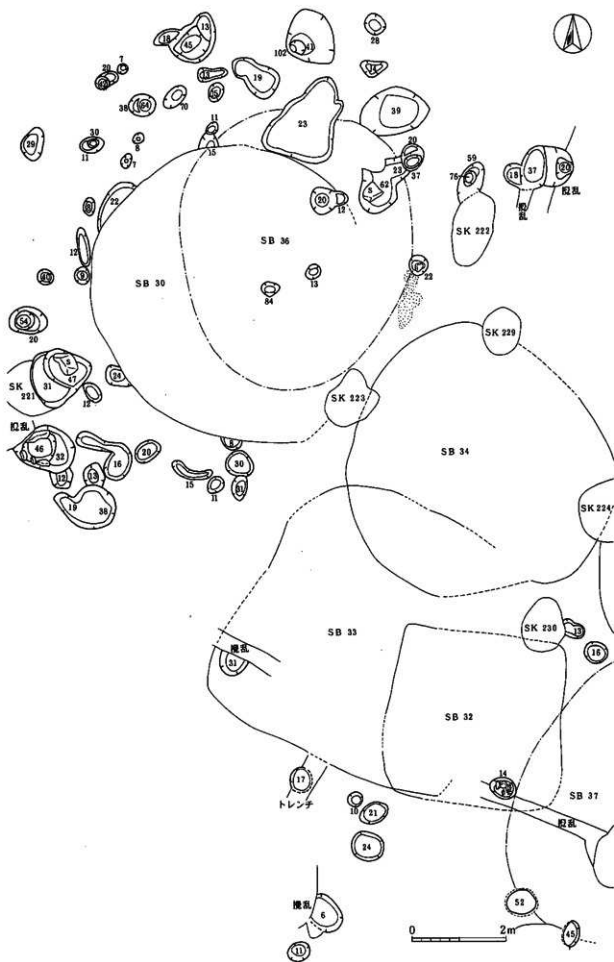




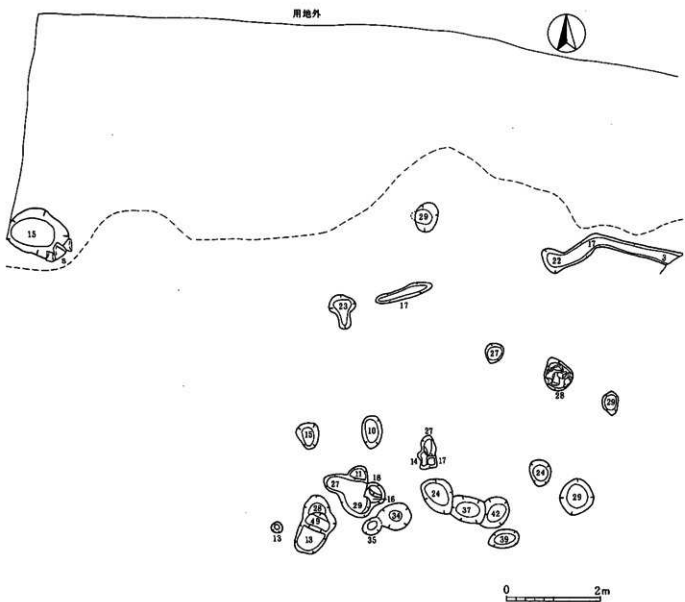
第24図 B地区 ピット (5)



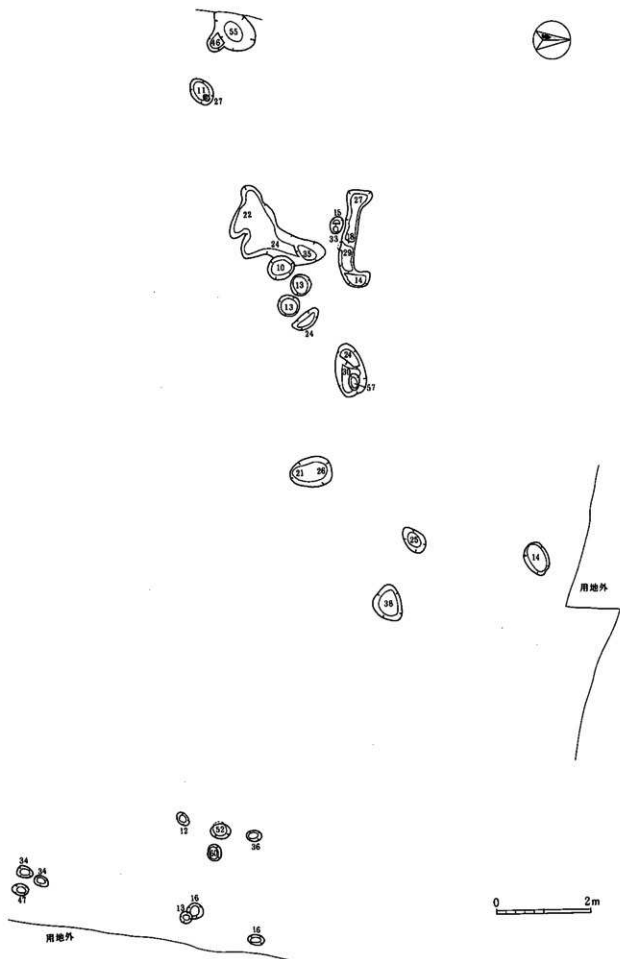
第25図 B地区 ビット (6)



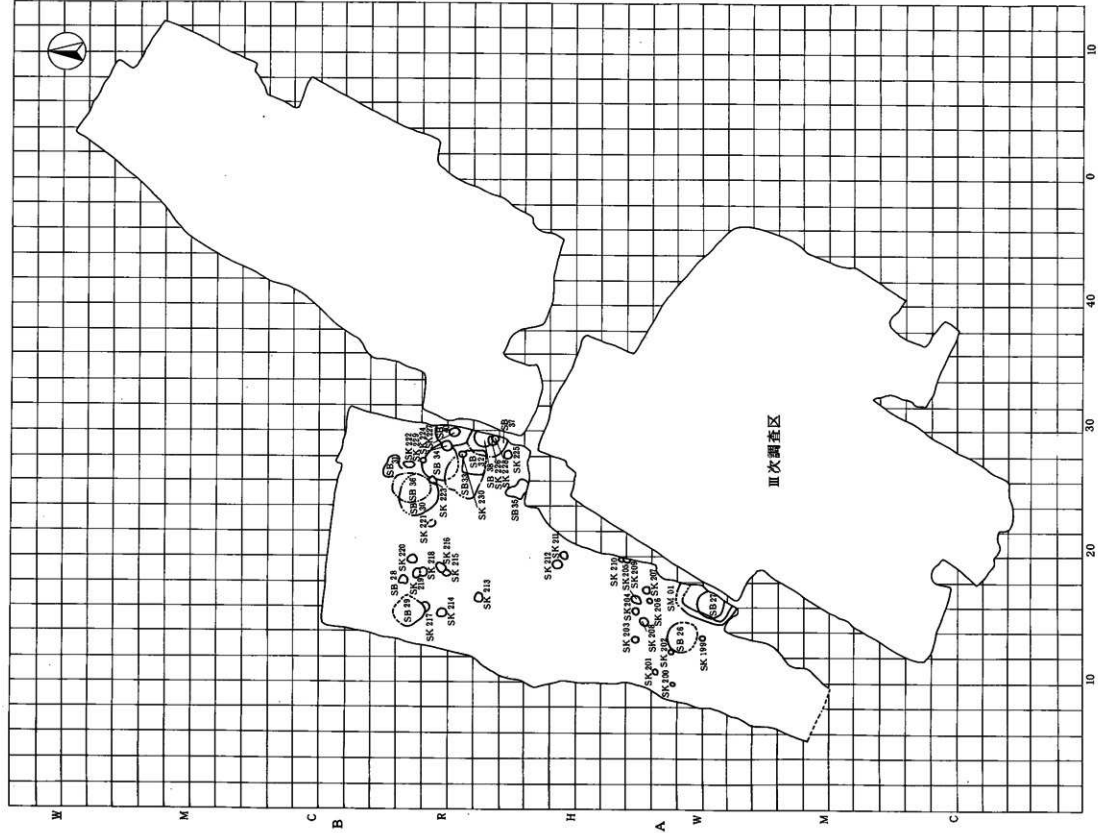
第26図 B地区 ピット (7)



第27図 B地区 ビット (8)

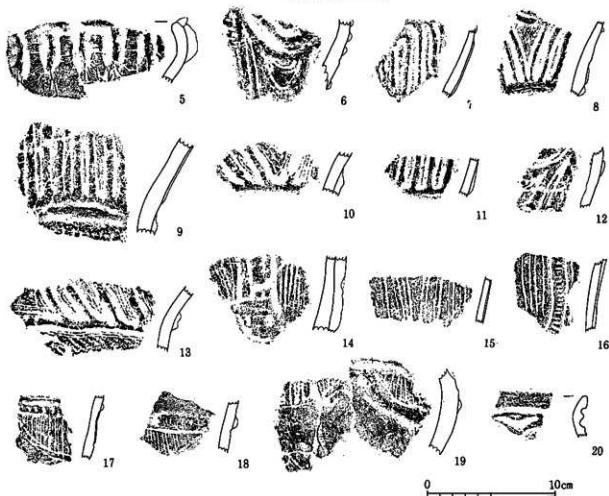
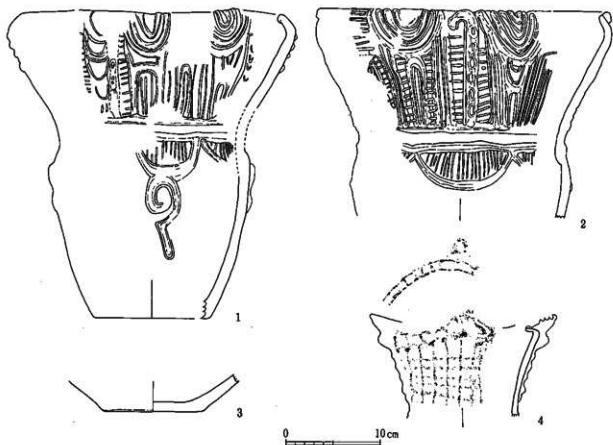


第28図 B地区 ビット (9)



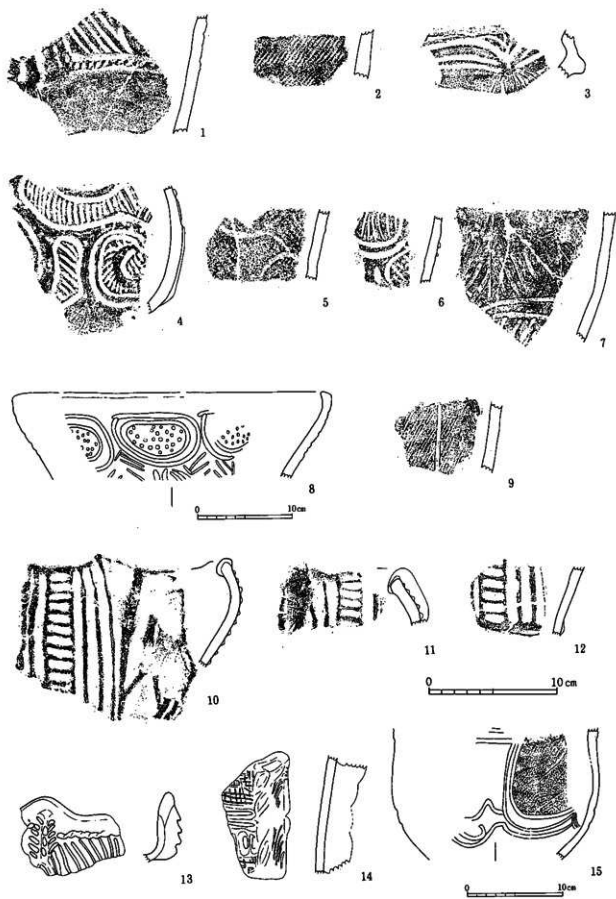
第29回 三尋石遺跡 IV次調査遺跡分布図





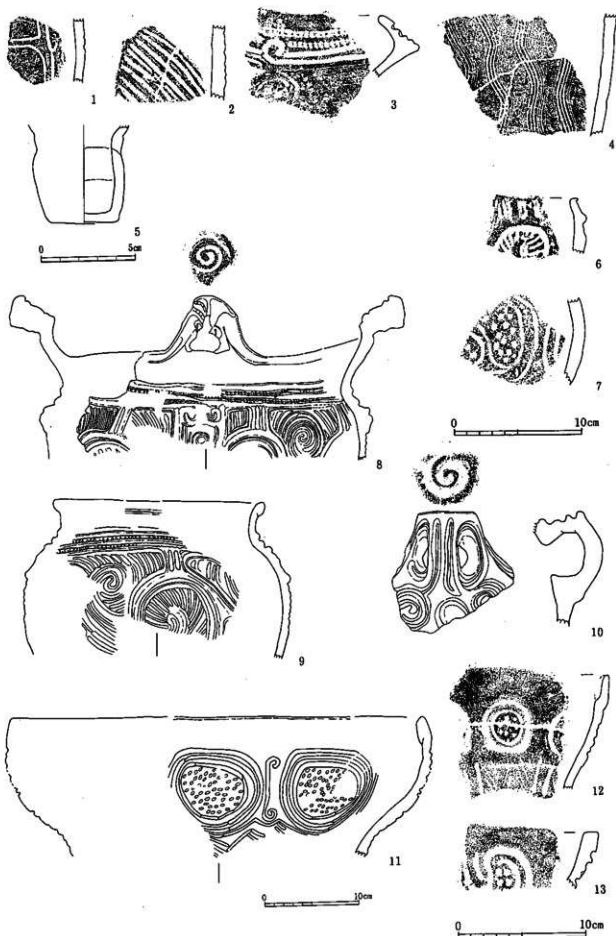
第30圖 出土遺物 1~20 SB26



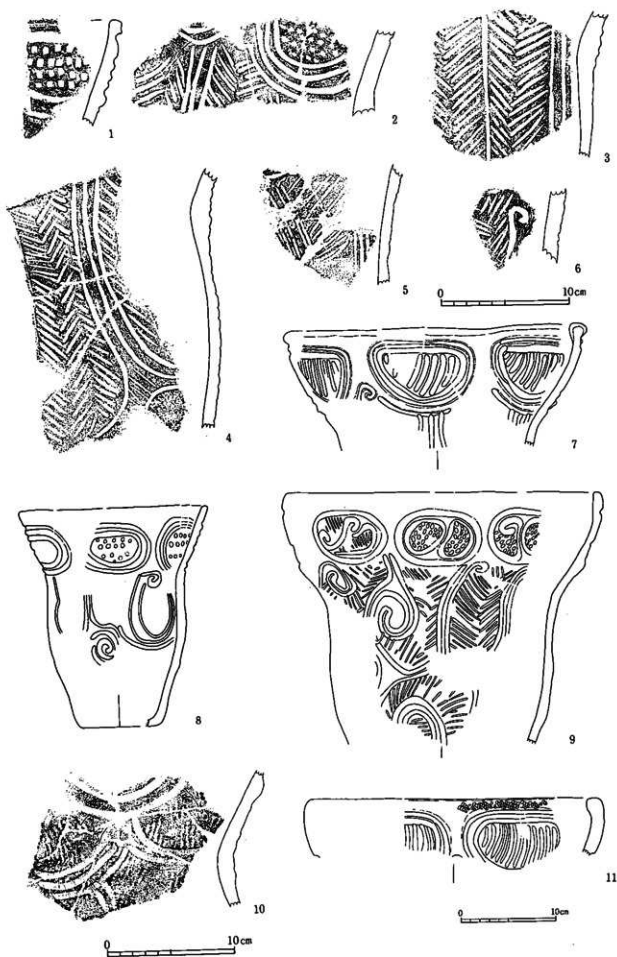


第31图 出土遺物

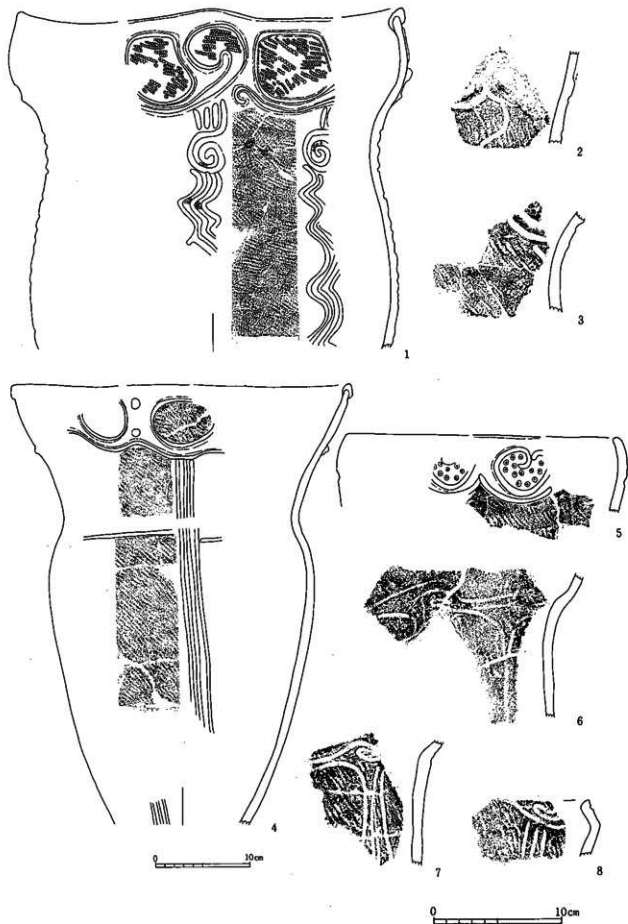
1~3 SB26  
 4~9 SB27  
 10~14 SB28  
 15 SB29



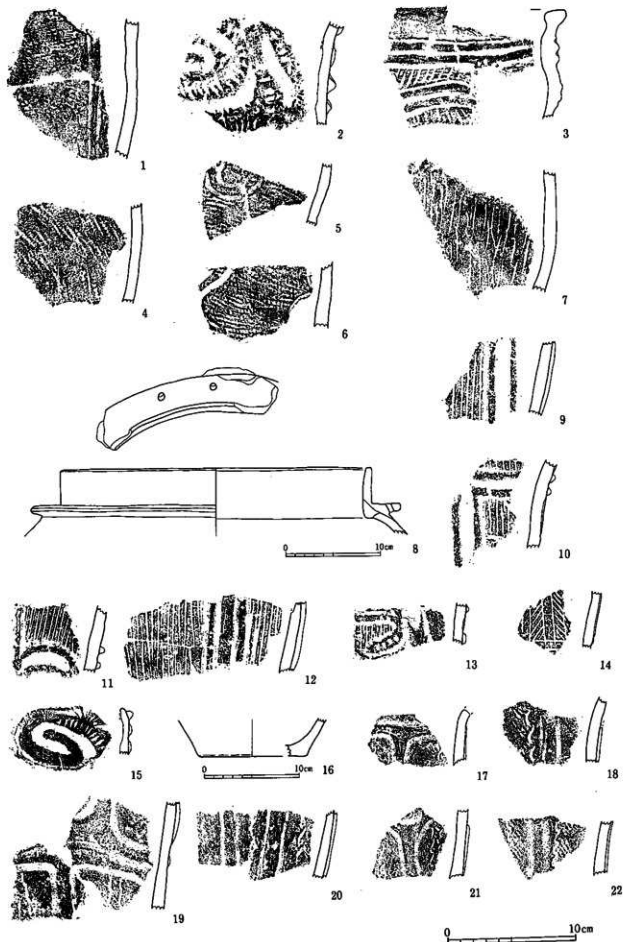
第32圖 出土遺物 1~5 SB29 6~13 SB30



第33图 出土遺物 1~11 SB30



第34图 出土遺物 1~8 SB30

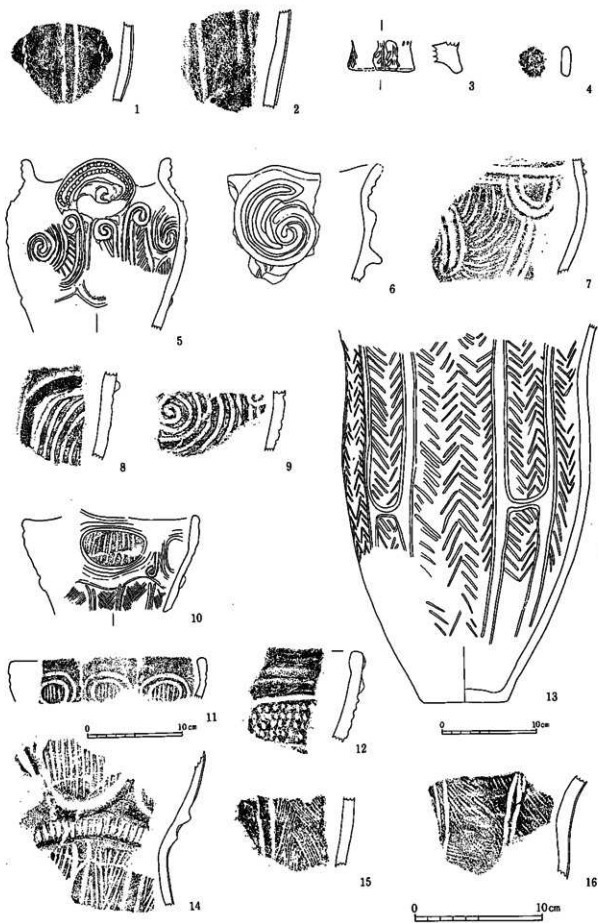


第35圖 出土遺物

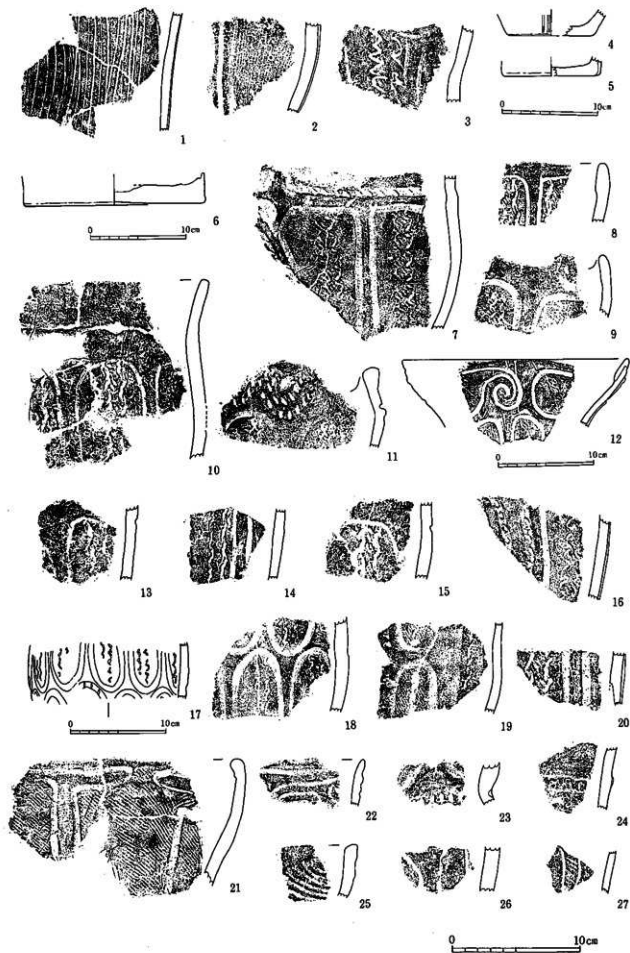
1~8 SB30

9~16 SB31

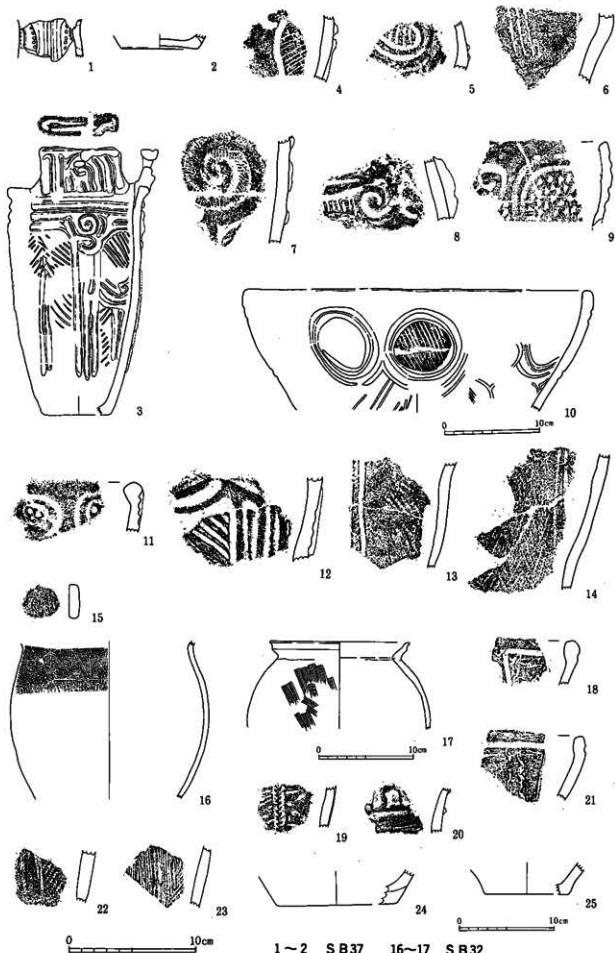
17~22 SB33



第36图 出土遺物 1~4 SB33 5~16 SB34



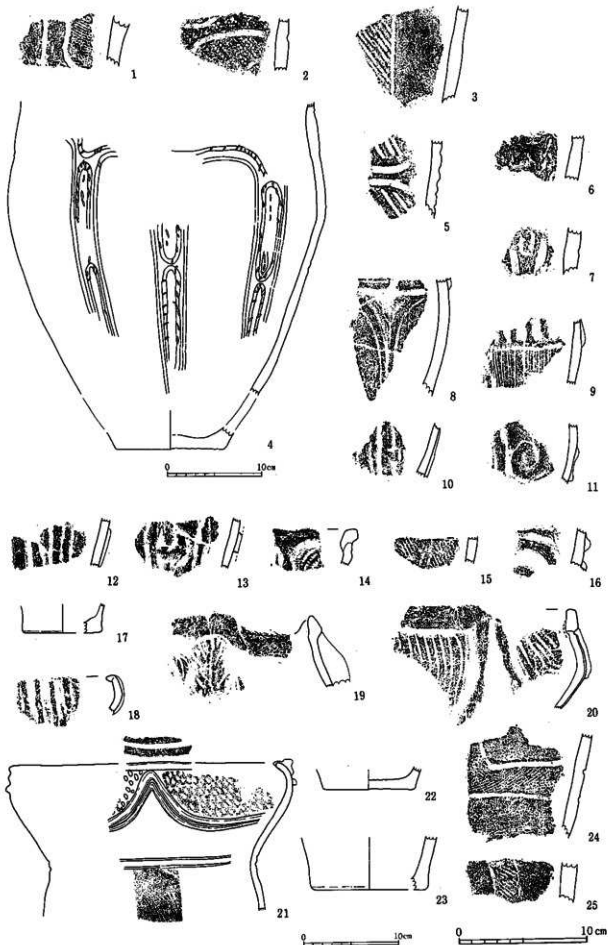
第37図 出土遺物 1~6 SB34 22~27 SB37  
 7~21 SB36



第38图 出土遗物

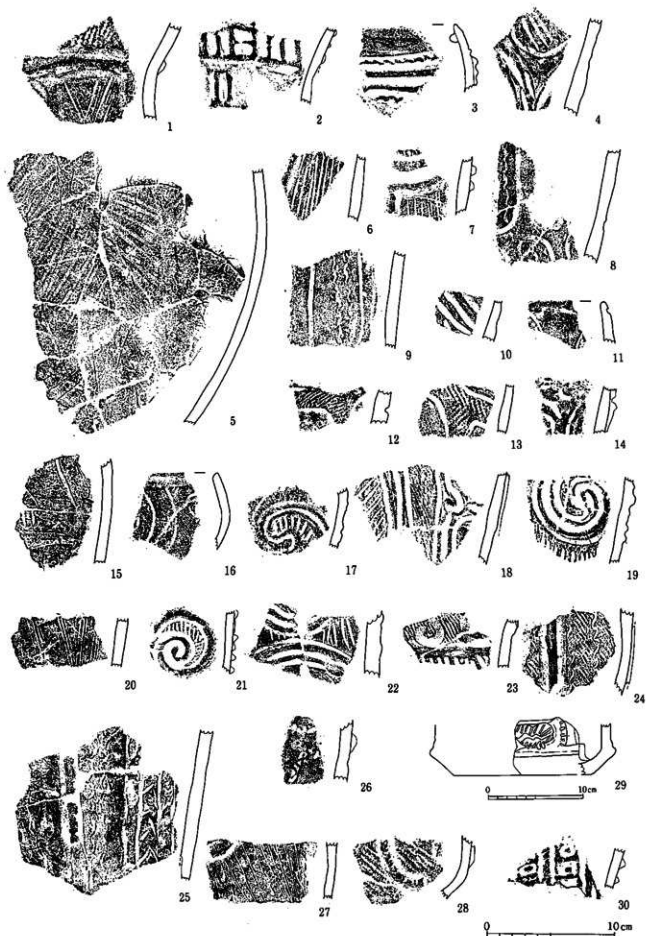
1~2 SB37 16~17 SB32  
 3~7 SB38 18~25 SB35  
 8~15 SB40





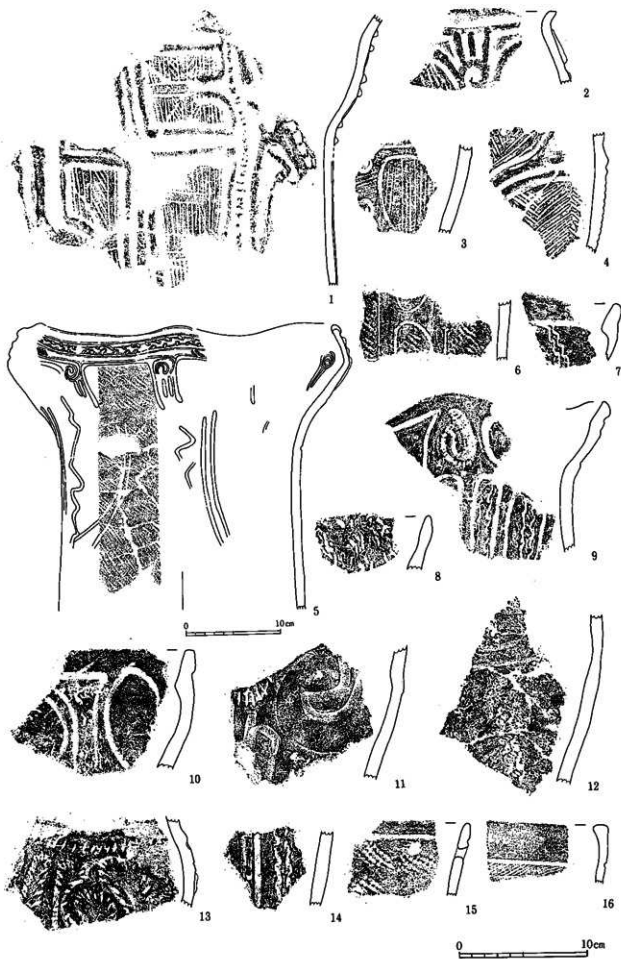
第39圖 出土遺物

1~3	SM01	6	S K 201	14~17	S K 207	22~25	S K 212
4	埋設土器 1	7~9	S K 202	18~20	S K 208		
5	S K 200	10~13	S K 206	21	S K 209		

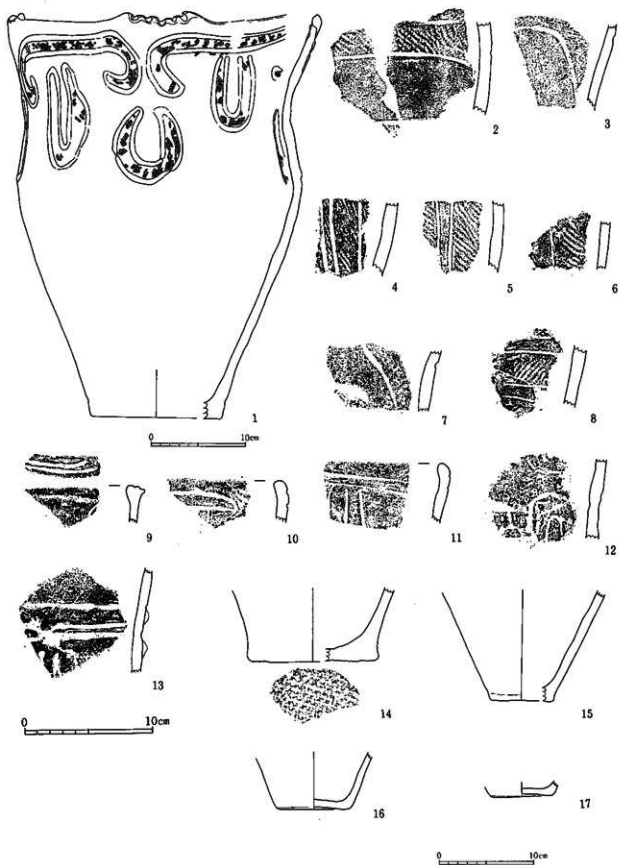


第40图 出土遺物

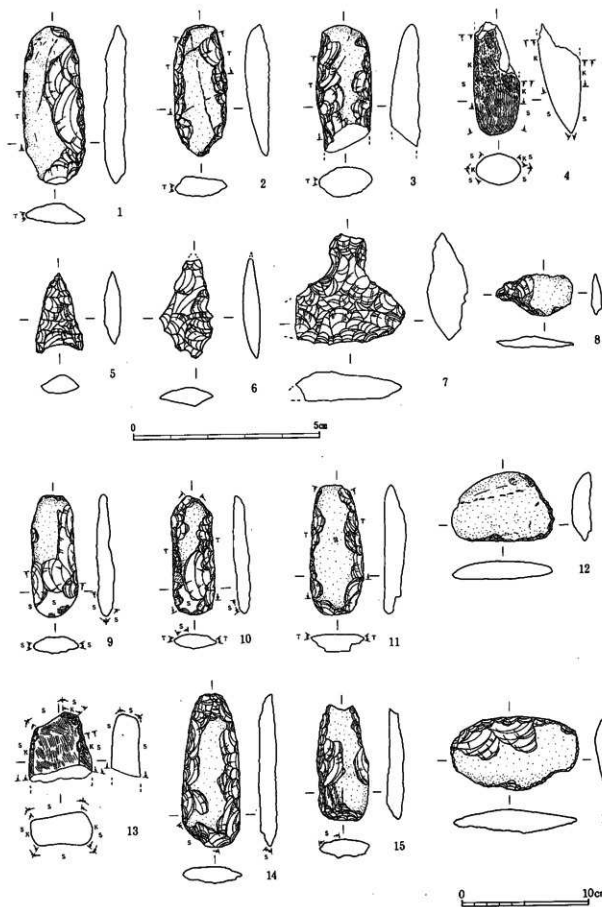
1~2	SK 215	6~7	SK 221	16	SK 224	25	SK 227	28~30	遺構外
3~4	SK 216	8~9	SK 222	17~20	SK 225	26	SK 228		
5	SK 218	10~15	SK 223	21~24	SK 226	27	SK 229		



第41圖 出土遺物 1~16 遺構外

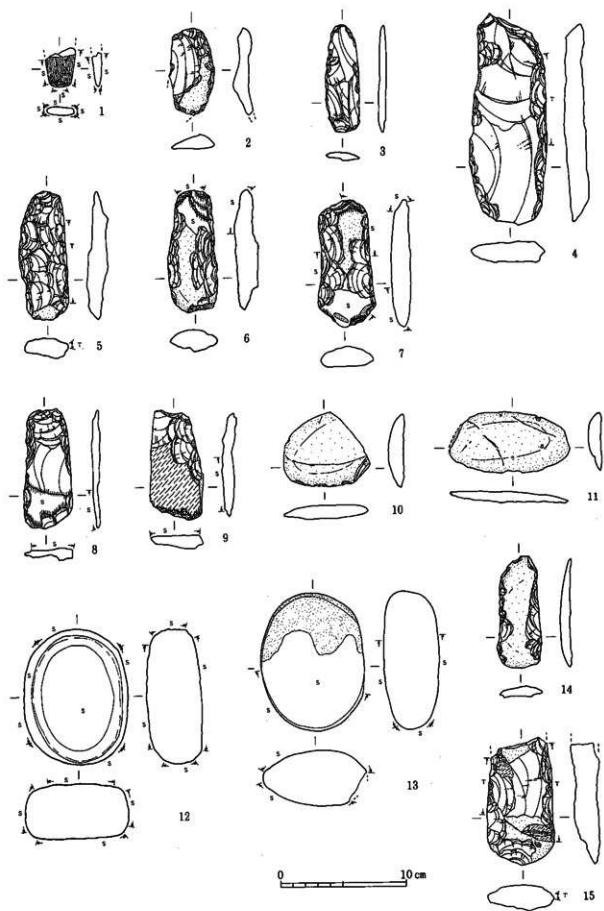


第42圖 出土遺物 1~17 遺構外

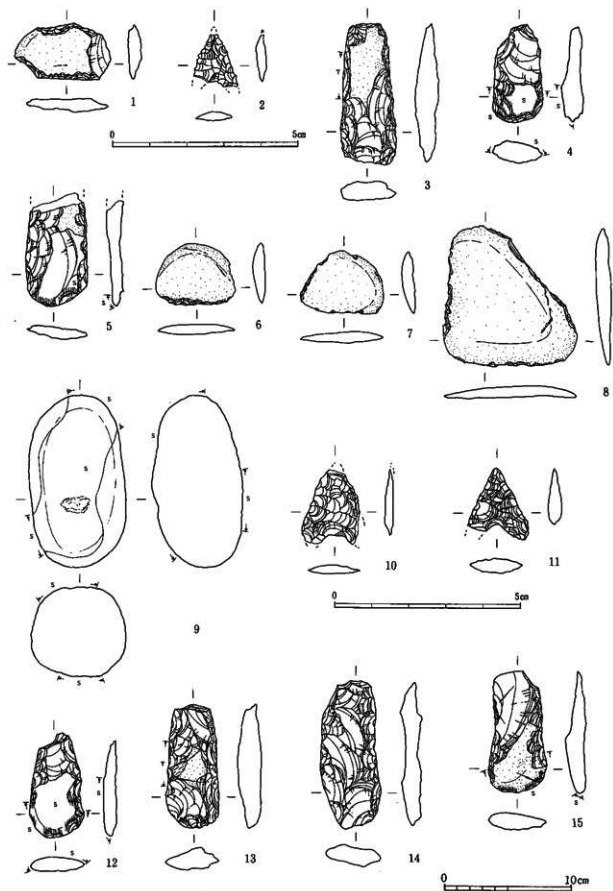


第43圖 出土遺物

1~8 SB26 14~16 SB28  
9~13 SB27

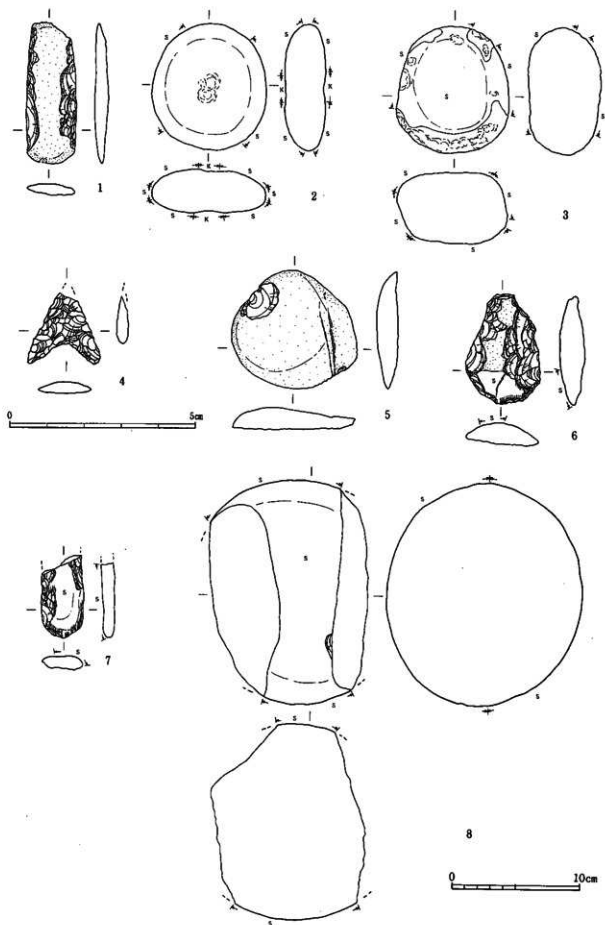


第44圖 出土遺物  
 1・2 SB28      5～13 SB30  
 3・4 SB29      14・15 SB33



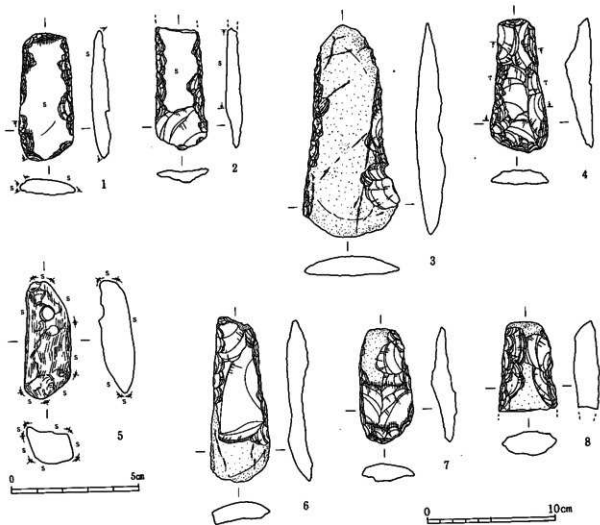
第45图 出土遺物

1・2 SB33      12 SB38  
 3~11 SB34    13~15 SB40



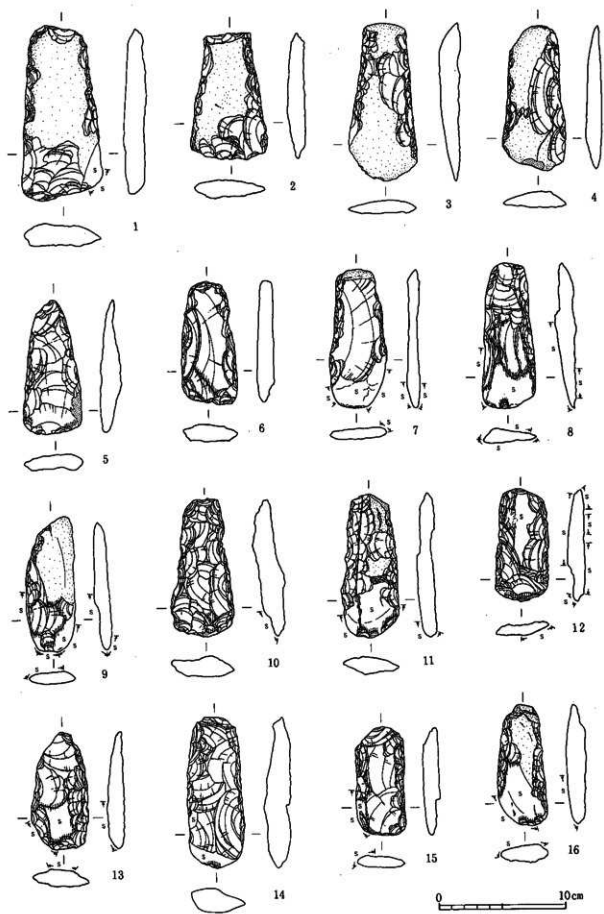
第46圖 出土遺物 1~4 SB40 6~8 SB35  
5 SB32



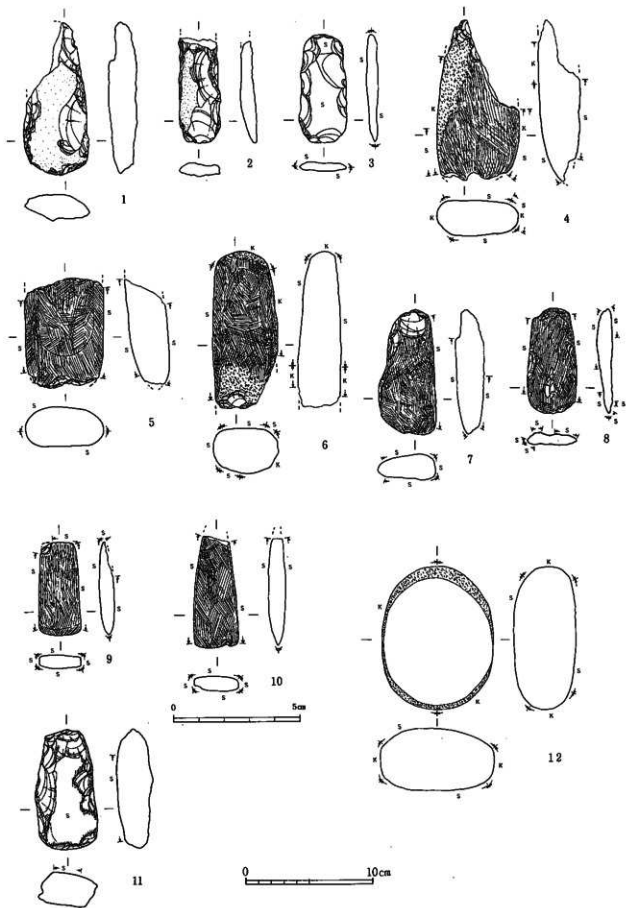


第47図 出土遺物

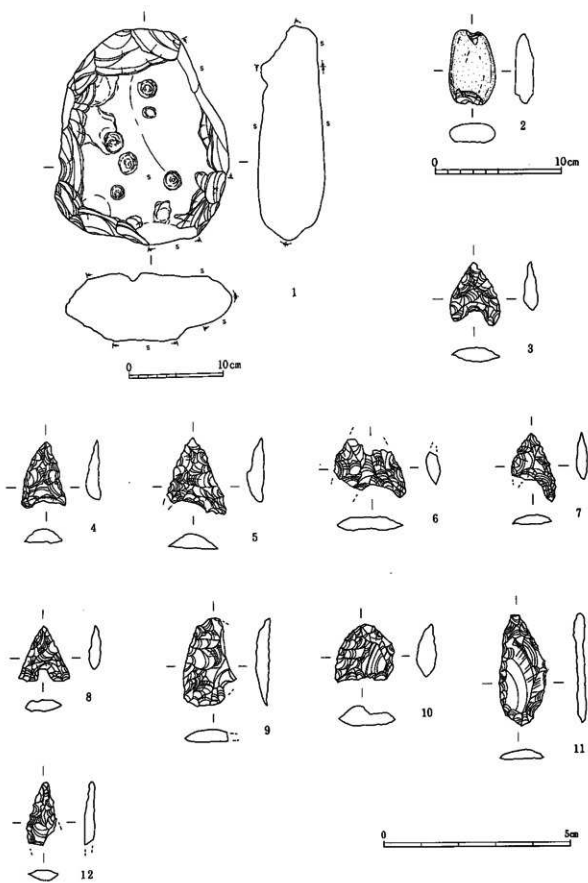
1・2	S K 207	6	S K 218
3	S K 212	7	S K 219
4・5	S K 215	8	S K 222



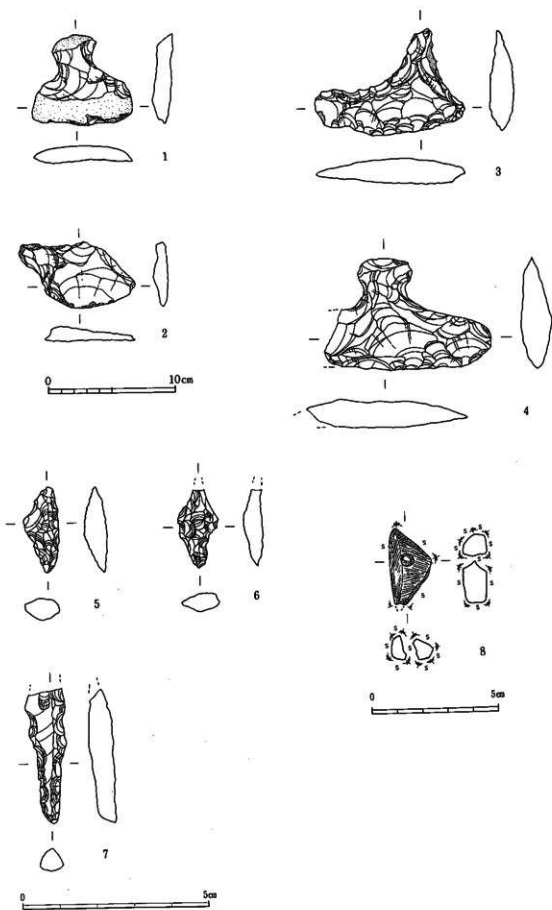
第48图 出土遗物 1~16 遺構外



第49图 出土遗物 1~12 透模外



第50图 出土遺物 1~12 遺構外



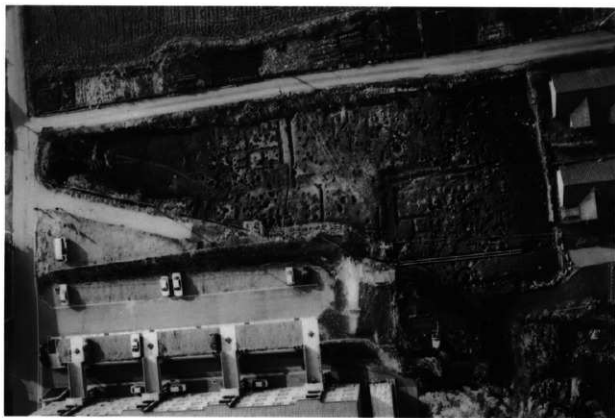
第51图 出土遺物 1~8 遺構外

# 写真図版





调查区全景



B地区全景





A地区全景(部分)



同上



同上



B地区全景 (部分)



同上



同上



S B26



同 炉址



同 置物出土状況



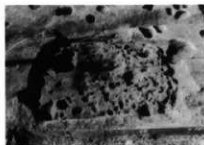
同 掘り方



S B27



同 炉址



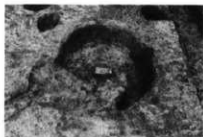
同 掘り方



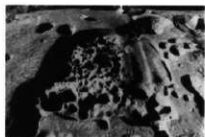
S B 28 炉址



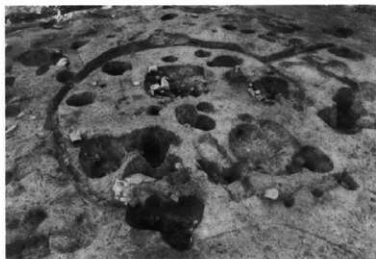
S B 29



同 炉址



同 掘り方



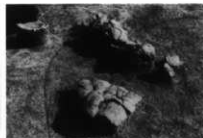
S B 30



同 炉址



同 埋甕断面



同 遺物出土狀況



S B 31



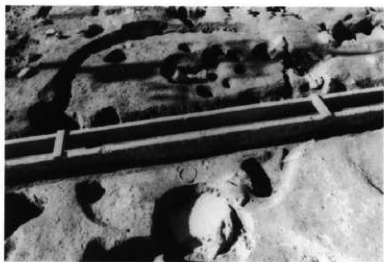
同 炉址



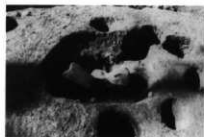
S B 33



同 炉址



S B 34



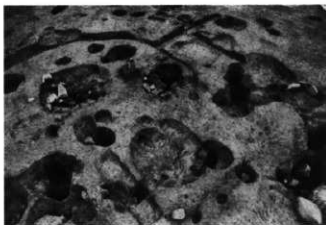
同 炉址



同 埋甕断面



同 埋甕断面



S B 36



同 炉址



S B 37 · 38



S B 37 炉址



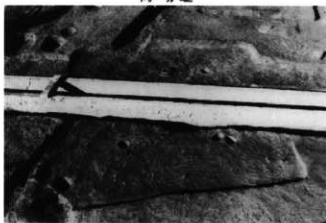
S B 38 炉址



S B 40



同 炉址



S B 32



同 炉址





S B35



同 礎分布状況



S M01



埋設土器 1



同 断面



後期土器出土状況

S K 212



S K 214



S K 223





調査スナップ



同上



作業員一同

重機作業スナップ



基準点測量スナップ

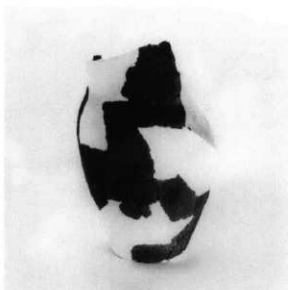


空撮スナップ





SB30



SB30 埋甕



SB34 埋甕



SB38



埋股土器 1



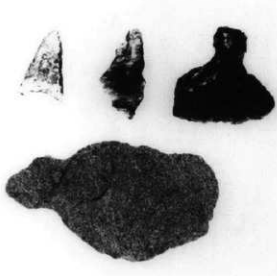
遺構外



遺構外



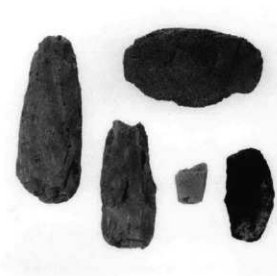
S B 26



S B 26



S B 27



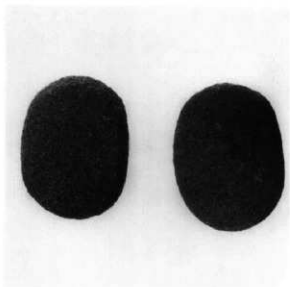
S B 28



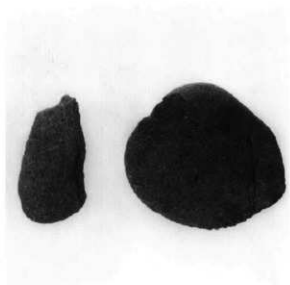
S B 29



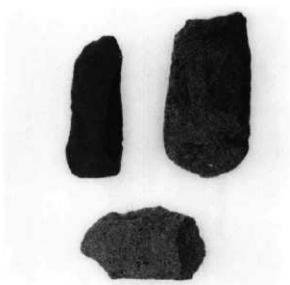
S B 30



S B 30



S B 32 · 33



S B 33



S B 33 · 34 · 40



S B 34





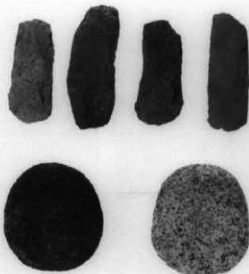
S B34



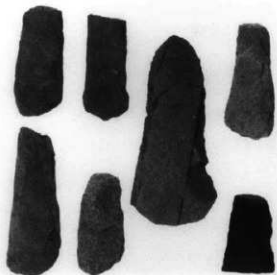
S B35



S B35



S B40



S K



S K ・遺構外

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	みひろいしいせき よん							
書名	三尋石遺跡 IV							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	吉川 金利							
編集機関	長野県飯田市教育委員会							
所在地	〒395-0002 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 ☎0265-(53)-4545							
発行年月日	西暦1999年3月日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
みひろいし 三尋石遺跡	いいだしおおせぎ 飯田市大瀬木 1971-1	2053	250 伊21	35° 29' 50"	137° 47' 10"	平成10年9月8日 から 平成11年3月25日		公営団地 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
三尋石遺跡	集落址	縄文時代中期 ～後期	竪穴住居址 12 埋設土器 1 土坑 32	縄文土器 1 縄文石器 翡翠製垂飾		縄文時代中期後葉の集落の 一部を調査		
		弥生時代後期	竪穴住居址 1	弥生土器		高地に於ける弥生時代後期 の集落のひとつ		

三 尋 石 遺 跡 Ⅳ

調 査 報 告 書

1999年3月発行

印刷・発行 長野県飯田市上郷3145番地

長野県飯田市教育委員会

印 刷 飯田共同印刷株式会社

